シャットダウン

Verfaiya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャットダウン

【Nコード】

N5785I

【作者名】

Verfaiya

【あらすじ】

変化がほしかった。

それでもいくら望んだところで些細な変化しかやってこない。

身が震えそうな変化。

大きな刺激。

ただそれを毎日毎日ほしがって下らない一日を過ごしていく。

そして不意に訪れる変化。

望んだ形とは全く違うそれに俺達は翻弄され生きていく

〈第一章〉

退屈。

毎日毎日つまらない日常をからくり人形のように繰り返して過ぎていく。

世の中でなにかが起こっても、それは自分達からかけ離れたところで起きる。

強盗、殺人、戦争、震災。

いつもデジタル化された画面の向こう側の出来事だ。

「はぁ……」

そんないつもと変わらない日常も今日はズカズカとやってくる。

カーテンの奥から差し込む太陽の光と、朝特有の……朝食の匂い。

平常の朝が来た。

「……俺は朝からいきなりため息かよ」

重たい体を引き起こし、誰も居ない部屋で呟いた。

自分の部屋なんだ、独り言くらい言っても別に構わないだろう。

トーストの焦げた匂いを嗅ぎ付け、俺は自分の部屋を出た。

一階へと続く階段を降り、俺の家族がいるリビングに移動した。

「あら」

そして・・・

「おはよう、今日もいつも通りね」

決まって俺の母さんが挨拶を投げ掛ける。

「まあね」

寝起きは悪くは無いが、無愛想な返事を母さんに返した。

「シャワー浴びてくる」

「はい、ご飯と弁当出来てるから」

風呂場へ足を運ぶ俺に、母さんがそう呟いた。

「・・・」

頭上から容赦なく落ちてくるお湯は変則な動きを何一つせず俺に降りかかる。

こいつらは蛇口を捻れば出るといふ風に俺の人生も決め付けられて
いるのだろう。

などと可愛げのないことを思った自分がすこし嫌になった。まあ自分には好きだけど。

俺はシャワーの責務を全うさせて、浴場から裸体で飛び出した。

なんで飛び出したかって？

「寒っ！」

無理もない。

夏を通り過ぎると決まって寒い季節がやってくる。

10月の寒気の中シャワーを浴びれば寒くもなるのは当たり前だった。

さらに俺はシャワーが長い。30分は入る方だ。

浴槽のドアの脇に引っさげられたバスタオルに包まり、頭を拭いて下着を着、リビングへと足を戻した。

「じちそうさま」

「おそまつさま」

朝食中に終始、鼻をズビズビすすっていた俺は、暖房の効いたリビングのおかげで震えることはなくなっていた。

「姉ちゃんはまだ起きてないの？」

いつも寝坊がちな俺の姉は、決まってギリギリに起きてくる。

「そうねえ、もうそろそろ起きないと遅刻しちゃうかしら、起こしてきて」

そして、決まって姉を起こすのは俺の役目だ。

コンコン。

『しいなのへや』と可愛く書かれた扉を2度ノックする。

しいなとは俺の姉の名前だ。漢字は椎名と書く。

いつも通りに返事が無いので、扉を開けて若々しい女子高生の部屋に入り込む。

不純？関係ないだろ姉弟なんだから。

ちなみに俺が高校2年生で姉は3年。

年もれつきとしてひとつ違いだ。

「姉ちゃん？遅刻すつぞ？」

「……」

返事が無い。ただの屍のようだ。

「おい姉ちゃん！！本気で遅刻だっつうの！」

「・・・」

頑としてぴくりもしない姉。

姉はホント寝起きが悪い。

ちっ、仕方ない。いつものあれを使うか。

そういつて俺は、姉の横たわるベットへと静かに歩み寄る。

そして・・・

「しい姉、起きて？」

と、少し高い声で耳元で呟いた。

「!?!?」

すると姉はベットから凄まじい勢いで、飛び起きると寝ぼけ眼とは思えないくらい瞳を開けて俺を見つめた。

「おはよう姉ちゃん、早く支度しねえと遅刻すっぞ」

さてと俺も支度するか。

起きたことを確認すると姉に背を向けて扉に向かった。

「もう一回…！」

「死ね」

ベットの上で両手をそろえて懇願する姉を見向きもせず、部屋を出た。

姉の部屋の向かいにある『いおりのへや』と書かれた扉を開く。

そう。俺の名前はいおり。

上総家の長男。上総伊織だ。

少し女っぽいのは、どうやら俺の母さんと親父が姉妹がよかったかららしい。

とんだ迷惑な話だぜ。

この名前でどれだけからかわれたことか。

まあ嫌いじゃないけど・・・

寝巻きをベットの上に放り投げてクローゼットの中にある制服を取り出す。

灰色のスラックスと紺のブレザーだ。

そしてブレザーの胸元には俺の通う桐峰高校の桐を絵の様に崩したシンボルが入っている。

それを羽織って部屋にある大きな鏡の前に。立ち尽くした。

ドライヤーのコンセントを差込み、コテの電源を入れて髪をセットする準備を始める。

ワックスはそんなに使わないため時間はかからない。

まあ誰も俺のことなんて見ないだろうが気休めみたいなものだ。

そんなことを言ってるうちにセットは終了した。

早すぎる？いちいち説明する意味は無いから早いだけ。

スクールバックを手にとって『いおりのへや』を出ると、そこに居たのはシャワーを浴びて濡れた髪を拭いている姉が居た。

「伊織くさっきのもう一回だけ言ってよぉ〜」

「言うわけねえだろ、そもそもあれは姉ちゃんが起きないときのための必殺技だ。ゲージが3つたまらないと使えねえんだよ」

「馬鹿のこと言っていないでお願い」

「人がせつかくぼけたのに流すなよ。もう言わない」

「う、ごめん！、ゲージって・・・まさか格闘ゲームじゃあるまいし〜」

俺がふてくされた態度をとると、そそくさと謝りいかにもな棒読みでそういった。

俺はそんな言葉を無視して1階へと向かった。

なんで姉があ言葉にあんなに執着するのかって？

俺がまだ小さい頃にずっと姉のことをしい姉、しい姉と言っててそれがとても可愛かったらしい。

まあそれだけのことだ。

俺はリビングに着くと先ほど朝食をとったテーブルに座る。

時間が来るまでニュースでも見てよう。

テーブルの上においてあったチャンネルリモコンを取ってテレビの電源を入れた。

『臨時ニュースです』

タイミングいいな・・・

つけた瞬間に、いつも見慣れているスタジオの風景とアナウンサーの人ではなく、年配の年を取ってしわがれた顔の眼鏡を掛けたおじいさん。

そして背景に無数のテレビと人が行きかう場面になっていた。

『今朝の後部線掛山行きが始発電車が突如・・・』

「伊織」

ニユースの途中で完璧に支度を済ませた姉が俺とテレビの間に割って入ってきた。

「あつ姉ちゃん邪魔！今俺らのいつも乗ってる電車の名前が出た！」

「ニユースなんか見てないで早く行こつ？遅刻しちゃうよ」

そういつて姉は俺の手を引き無理やりテーブルから立たせた。

「ちょ・・・ちつ、行つてきまあす！」

気になったニユースを最後まで見ることは叶わず俺は姉に手を引かれ我が家を飛び出した。

第二章

場面は移り変わり、今俺と姉ちゃんがいる場所は、通勤通学のラッシュに揺れる地下鉄のホームだ。

どうやら朝のテレビのニュースは俺達がいつも使っている電車の始発列車だったらしく、何が起きたのかは詳しくは知らないが、どうやら一本前から運行を再開したようだ。

遅延の影響でいつにも増して人があふれかえるむさ苦しいホームに吐き気を覚える。

くそ・・・外は寒いから着込んできたのが裏目に出た・・・熱すぎる。

ワイシャツの下には長袖、そしてブレザーの下には厚手のカーディガンを着ているため人のひしめき合う地下鉄のホームでは足りすぎた重装備だ。

襟元を開け、自分の手で涼しい風を服の中に送り込んだ。

あまり変わらないと思うのだが、暑いと何故かやってしまう。

となりの姉ちゃんも暑そうに襟元をあおいでいた。

「最悪・・・どんだけ混んでんの？いつもよりひどいと思わない？」

「姉ちゃん、さっきのニュースやっぱり見てなかったろ・・・始発電車の遅延らしいよ」

明らかに驚いた表情をしている。

・・・ニュースくらい見ようぜ姉よ。

「ま、仕方ないでしょ。どうせ10分しか乗らないんだし立っても座れても変わらんだろ」

「モチベーションは変わる。その日のやる気にかかわってくるもん」

「はいはい。あ、電車着たよ。逸れんなよ?」

「子ども扱いするな!!」

慌てるようにホームに駆け込んでくる列車に、いまかいまかと待っていた人の群れが空席を狙って一歩踏み出す。

アナウンスの注意に耳も傾けずに白線も越える人たち。

これが人身事故を招く原因だ。

特に事故も無く滑り込んできた列車になだれ込む人、俺達は逸れなように何の意識もせげずに手をつないだ。

少なくとも俺は・・・

『桐峰〜桐峰でございます。お降りの際は一部ホームと電車との間

が広く開いておりますのでご注意ください』

聞きなれた声と聞きなれた駅名、そして聞きなれた呼びかけに反応して、込み合う車内で開くドアの方に移動する。

徐々に減速し、ホームに到着すると扉が開き、いつぺんに人が降車する。

辺りを見ると皆、桐峰の制服を纏っていた。

「ふう〜疲れた〜。やっぱり座れなかった・・・モチベーション下がる〜」

分かっていたことにいちいち反応する姉ちゃんにつっこみを入れることすら疲れたので、とりあえず聞きながす。

「今は・・・8時か。よかった間に合って」

親父から貰った形見の・・・時計に目を移すといつも通りの時刻を指差していた・・・

そう。親父は死んだ。

いや、死んだかどうかは分からない。行方不明。

暗くなるからこの話はこれだけにしておこう。

すくなくとも家は母子家庭ということだ。

「姉ちゃん。コンビニよる?」

「ふん」

いつものことながら学校前は決まってコンビニによるので今日もそれに変わらずよることになった。

第三章

「じゃ、また放課後」

「またね、伊織」

コンビニのビニール袋を手に提げ玄関にある下駄箱で姉ちゃんと別れを告げた。

いや。。。だって学年違うし。

時計に目をやると8時20分。

いつも通りの時刻だ。

「はあ」

ため息をつき、クラスへと足を進める。

またいつもと変わらない日常が始まった。

別に学校が嫌いというわけではない。

ただ刺激が無さ過ぎる。

平和で平凡なのが一番幸せというが、さすがにここまで同じことを繰り返すのには疲れた。

みなはどう思っているのだろう。

このまま何も変わらない日常を望むか。

変化を求めて日々を憂鬱に過ごしているのか。

少なからず俺は後者のほうだ。

ただ少しの刺激でいい。

ほんの小さなしげ・・・

ドゴオツツ!!

そんな俺の背中に刺激・・・ではなく衝撃が走った。

「おおおすうう!!伊織いい!!」

出た・・・

怪獣『クソウルサウルス』

名前の由来は・・・

「どおしたあ?そんなだるそうな顔をしてえ!?!」

くそつるさいからだ。

「っ痛えな・・・憲弘^{のしひろ}。お前は朝からつるせえんだよ」

「つるさいんじゃない!元気なんだ!」

こいつは憲弘。瀬田憲弘。

尖らせた茶色の髪型が突き刺さるように俺に向けられる。

あからさまに不良のような外見をしているがこいつは違う。

俺とは幼稚園からの腐れ縁で家族の次に一緒にいる時間が長い奴だ。

左耳に3つのピアスが太陽光に反射してきらりと輝く。

身長は180cmある俺よりほんのちつびと低い。

がつつり開いた瞳に合う、凜々しい眉毛。

明らかに熱血タイプの顔だ。

かなりかつこいいとは思うのだが、このうるささゆえ全くのド素人ドローだ。

俺と憲弘は空手道部に所属している。

2人とも小学生の頃にはじめて、今やめきめきと腕を上げて国体にまで名を上げられるようになった。

日々の努力と血と汗の結晶は決して裏切らない成績になる。

しかし俺は一度も憲弘に試合で勝てたことが無い。

というか憲弘が桐峰空手道部のトップ。俺が永遠のナンバーツーだ。

無論女子空手道部もあるのだが、体格差とそのたもろもろの事情で練習は別々だ。

準備体操や軽い練習は一緒にやるが、組み手は別々。

何かあったら困るだろ？

柔道部とは違って空手道部にはメスゴリラ見たいなのは少ない。

おっと、失言だ。

「少し静かにしろ。朝列車が込んでて機嫌悪いんだよ」

「元気なのが何が悪い」

ぶーぶー言っつてふてくされながら俺の横に並ぶ。

黒髪ショートでいかにもな真面目ちゃんぶってる俺とツンツン茶髪にピアスといういかにも不良が並んで歩く。

どう見たっっておかしい。

「おはよございませう。瀬田先輩、上総先輩！」

「あ、瀬田くんの上総くんじゃん！おはよう」

「おはよございやすー！瀬田さん、上総さんー！」

普通の後輩学生。姉ちゃんと同じ学年の女の先輩。空手道部のいか

つい後輩。

様々な生徒から挨拶をされる。

有名人てのはこんな気分なのかな？

「おはよ〜」

「おつすー!!」

俺と憲弘はそれらに適当に挨拶をしてクラスを目指す。

そう。おんなじクラスだ。

どうやら神様が俺達を一緒にさせたいらしく、仲良くなった小学生時代から一回も別のクラスにはなったことが無い。

「おはよ」

「おつはー!!」

クラスの前にたどり着いてその扉を開けた。

すでに数名の学生が仲のいい友人達といつもと変わらない会話をしていた。

昨日のテレビ、他学生の話題、趣味の語らい。

あげれば尽きることは無いが彼らはそれに退屈はしない。

「上総と瀬田、おはよ〜」

「グッモーニン！」

そんな会話も一時中断してみんな挨拶を返してくれる。

変化を求めている俺だが、この関係だけはいつまでも変わってほしくはないと思った。

「伊織！憲弘！」

皆が、おのおのに中断していた会話を再会する中、一人の女学生が俺ら2人の『名前』を呼んだ。

「千春か」

「千春おっは〜」

隣同士の席に着いた俺達に話しかけてきたこいつ。

こいつは杉下千春。

憲弘と変わらない腐れ縁だ。

幼稚園、小学生、中学生と俺ら3人は仲良し組みでよくつるんでいた。

黒の長髪を左サイドポニーにし、前髪の右側に茶のメッシュを入れてる。

大きすぎづ小さすぎづの瞳に手入れのされた眉、特にいじっても居ないのにマツチ棒が3本ほど乗りそうな長く反り返ったまつげ。

小ぶりな鼻と小ぶりな口にすつと細待った輪郭。

率直に言おう。可愛い。

だけど、長年付き合ってきたのか恋愛感情は芽生えず、親友としてとても大好きだ。

よく男女間の友情はありえないというが、すくなくとも俺は友達として見ていた。

それに千春は・・・憲弘のことが好きなのだ。

「伊織、今朝のニュース見た？」

俺ではない、俺の隣にいる奴。

「いつも伊織たちが乗ってる電車の始発列車が突然運休だってね」

いつも真っ直ぐに生きていて、何事にも真剣に取り組んできた奴。

「でも、そのつぎの列車から何にも無かったように運転再開だってね」

瀬田憲弘。千春が好きなのは俺ではなくて憲弘だ。

「次の便に乗ったんでしょ？大混雑だったって・・・」

そう、千春から聞いた。

「・・・聞いている？」

「んあ？あ、ああ、悪い。ぼーっとしてた」

あからさまに話を聞いていなかったらしい俺の顔の前で手をひらひらさせて注意を呼んだ。

「もー、聞いてなかったらいいもん」

「悪かったって、そう怒るなよ」

本当に聞いていなかった。千春が何を言っていたのか全く覚えていない。

「そうだぜ千春、こいつが朝からこんな調子なのはいつも通りだろ？」

「確かに」

そういつて千春は授業の準備を始めるといい、席へ戻っていった。

いつも通りか・・・

この友情もずっと変わらずに続くのだろうか。

続いてほしい。続けてもらわなくては困る。

だけど千春か憲弘のどちらかが告白したらこの関係は終わるだろ

う。

まあ鈍感な憲弘のことだ、自分が好かれていることも自分が誰が好きなのかもわからないだろう。

そう頭の中で解釈すると、1限の授業の教師が入ってきた。

またいつもと変わらない授業が始まる。

「おはよう。今日は気分がいいからいまからテストするぞ。ノー
ト教科書しまえ」

いつもと・・・違った。

〜第四章〜

太陽は昼間の激しく燃え滾った陽光とは打って変わって地平線にその身を落とそうとしている。

一定のリズムで黒板に書き綴られる白い文字を一生懸命に写し、体の気だるさとも戦う。

不意にその戦いに終わりを告げる鐘が鳴り響いた。

「じゃあ今日はココまで」

黒板に字を書けるだけ書いて満足そうに教師が教室を出て行った。

「ふう・・・書きすぎなんだよあいつ、やっと終わったぜ」

口からため息を漏らし、酷使した右手の関節を鳴らす。

「疲れたぜー伊織」

「ああ、でも今日も終わりだ」

隣では机にうな垂れた憲弘が朝の元気の欠片も見せずに呟いた。

「そっぴや憲弘、お前昼飯のときどこ行ってたんだ？」

いつも憲弘と一緒に食べるのだが用事があるといい、今日は別の奴と食べた。

「あ、ああ、ちよつとな・・・千春に呼ばれてよ」

「え？」

心臓が震えた。

何があつた？何の用事なんだ？何を言われたんだ？

頭の中で様々な憶測が飛び交い、思考回路をショートさせる。

「まあくだらねえことだよ、俺がよく聞く歌手のCD貸してくれだつてさ」

「・・・そうか」

納得は出来なかった。そんなことなら別に呼び出さなくてもいいんじゃないか？

俺と飯食つてるときに普通に言つても何の問題も無い。

俺に聞かれてはまずいようなことなのか？

考え出したらきりが無かつた。

「ホームルーム始めるぞ、特になし。終わり」

そんな考えをやる気の無い掛け声とともに、授業の最後を締めくくるホームルームを終わらせる声が響いた。

その声を聞いて生徒達がどっと席を立ち、いっぺんに教室から出て

行く。

俺も考えていたことを振り払い、憲弘と教室を出て行った。

〜第五章〜

ガタンゴトン……

鉄で出来た線の繋ぎ目を乗り越えるたびに音を上げる。

窓の外に目をやると、茜色に染まった世界が次々と通り過ぎていく。

今日も終わった。

一人電車に乗りながら、今日を振り返る。

いつも通り起きたいつもの朝。多少いざこざはあったが特に変わらない通学。いつも通りの学校。

今日もそんな一日だった。

ただ、気にかかることはあった。

憲弘と千春のこと。

あからさまな憲弘の言い訳が余計に不安な気持ちを煽った。

この関係だけは変わらないでいてほしい。

『次は辰見〜辰見です。お出口は左側です』

そんなことを考えているうちに家の最寄り駅に着くアナウンスが流れた。

憶測を消し去ることは出来なかったが、アナウンスのおかげで考えるのをやめることが出来た。

開いたドアを過ぎて改札を出ると茜色に染まる坂が見える。

かならず通る道。

ゆっくりと歩き家に着くと家族と温かいご飯とが待っている。

そして風呂に漬かり全身の疲れを癒して寝る。

これが俺の一日だ。

そして明日も変わらずにそれはやってきて平和で平凡な一日を繰り返す。

そうだと思っていた。

変化は確かに望んでいたがあんな変化は望んでなかった。

第六章

「……ん」

今日も無事目を覚ました。

寒気特有の肌寒い陽気が布団から抜け出そうとする意思を邪魔する。

「……寒い」

なんとか布団を退かし体を起こすと寒気がより一層体に突き刺さってくる気がした。

今日は一段と寒いな……今頃姉ちゃんはがたがたに震えて寝てんだろうな。

いつも薄着な姉のことだ。

寒いことを分かっているも無防備に寝ているのだろう。

「……シャワーいいや」

そんな姉の淫らの格好を想像しても何も感じないのはやはり姉弟だからだろう。

震える体に鞭を打つことから今日という一日が始まった。

「・・・まじで?」

「まじよ?」

リビングにいる俺は母さんから聞いた衝撃の事実には耳を疑った。

まあ、それほど衝撃でもないが。

「なんか今日は用事があるらしく20分くらい前に用意済ませて出てっちゃったわよ?」

「珍しいこともあるんだな」

そういつてほかほかのココアを胃に流し込む。

どうやら今日は姉ちゃんは先に学校に向かったようだ。

あの姉ちゃんが早起きをして学校に向かうなどとても珍しいことでも年に1回あるかないかの次元だ。

別に俺が定刻を過ぎて寝坊をしたわけでも、母さんが起こしたわけでもないらしい。

珍しいこともあるんだと考えてココアを飲み干し部屋へ向かって準備を始めた。

この小さな変化、これは俺の未来を示唆する始まりの変化だった。

〈第七章〉

準備を終えて定刻通り家を出た俺は、辰見駅へと向かっていた。

小鳥のさえずりや細々と吹く小さな風、それらに身を揺られ音を奏でる木々たち。

そのハーモニーに耳を奪われながらいつもの通学路を歩いていた。

「・・・？」

ふとあたりの異変に気づく。

人が・・・いないな・・・

いつもならこの時間は通勤通学者でかなりの人数がこの道を歩くのに。

まさか・・・

左腕につけた時計に目をやるも特にいつもと変わらぬ時間帯だった。

自然の合唱に気を取られて俺が遅れたのかと思ったがどうやら見当違い。

みんな遅刻か？

そんな奇跡のも近い偶然が起こりえるはずが無い。

不審を心に抱きながらも歩みを駅へ進めていく。

視野の中に駅が入ってくるが明らかにいつもより人が少ない。

曜日も平日で時間帯もいつもと変わらず。

なのにこの人の少なさは異常だった。

・・・まあでも何人かはいるし大丈夫だろう。

拭い去れぬ不審を勝手に理由付けして消し去ると、その足をホームへと向けた。

しかし、その不審はホームに着くと同時に確信へと変わり、そして底知れぬ妙な不安が俺を襲ってくるのだった。

地下鉄のホームに静寂が流れている。

生きるものの気配すら消し去るような張り詰めた空気。

というよりは・・・

「な、なんだよ、これ・・・」

俺の目の前に広がっていた風景は俺の心を不安の一色に染めるものだった。

「だ、誰もいねえ」

そう。

気配が無いのではなく、その気配を生み出すもの自体この場所に存在しなかった。

不安が心を覆う。

なんだよ・・・なんで誰もいない！

いつもならもう塵のような人数が押し寄せてる時間帯だぞ？

あと3分で次の電車がくるんだぞ？

長いホームに佇んでいるのは、端から端まで目をやっても俺一人。

地下独特の雰囲気と空気が俺を押しつぶそうとしていた。

この空間を支えるとても太い鉄柱も俺の心のように押しつぶされてしまっんじゃないかと思いはじめ。

どう考えたってこれはおかしい!?

なんなんだ!？何が起きてるんだ!？

プオオオオツ!!

「!？」

そんな気持ちに追い討ちを掛けるかのようにこの地下空間には鳴り

響くはずもない濁いた轟音が響き渡る。

「うるせっ!?!なんだ!?!」

つい言葉が口から出てしまいその汽笛にも似た轟音の聞こえてきた方のホームに目をやる。

シャツシャツシャツと鉄が擦れ合うような音と、幾度と無く聞こえてくる先ほどの轟音が暗闇の先のホームから聞こえてくる。

何がくるのか？

不安で心配になった俺は暗闇の先を目を凝らして覗き込んだ。

ひとつの丸い光が暗闇に浮かび上がっている。

それは轟音とともに徐々に徐々に大きくなっていく。

そしてそれは姿を現した。

「な、な、」

驚きで声も出なかった。

何しろ資格に捕らえたそれは、普通こんなところでは見られない、走らないものだったから。

しかもそれはおれの知っているそれとは大きく違っていた。

ただ、聞き覚えのある音とその姿、そして何より線路が俺に教えて

くれた。

「蒸気機関車？」

俺の不安を横目に蒸気機関車はホームに到着した。

そして再び熱せられたタイヤを冷やすめ冷気が車輪に送られ湯気が立ち込める。

「うわ！？ゴホゴホっ！」

その熱蒸気で視界が遮られ口から嗚咽を漏らす。

蒸気が晴れて再び見えたそのフォルムはどうやら普通の蒸気機関車とは違うようだ。

顔にあたる部分にはなにか中世ヨーロッパに出てきそうな兜のようなものをつけていて、胴体は角ばっているものではなく流線型。

関節のような列車との繋ぎ目には脈を打つかのような少々グロテスクな物体。

なにより、頭や胴体、関節と表現するのに相応しい位、生きているように見えた。

「なんなんだよ一体・・・」

全く現状をつかめていない俺の心が動揺をしている。

ただ不思議に思っただけの目の前の蒸気機関車を見つめることしかできな

かった。

バクンツ!!

「えっ!?!」

急に蒸気機関車の脇のドアが開いた。口を大きく開くかのように上下に。

驚きを隠せず体を一瞬強張らせた後、一步後ずさりする。

その口にも似たドアは今のも俺に喰いついてくるんじゃないかって位、殺気を放っていた。ドアの癖に。

すると、その奥からなにやら動く人影のようなものがつごめくのを確認した。

「な、にかくる?」

こちらに向かってくるのか、その人影は徐々に大きくなっていきそしてついに、その全貌を現した。

「よう。乗るか?」

「は???」

その人影はどうやら人間で、車掌のような格好をしていた。

よく見るあの車掌だ。

見た目はまだ若く20代くらい。明るすぎる茶髪と、手入れが全く行き渡っていない髭。

手には乗客名簿のようなものと切符を切るのであろう機械。

そしてそいつはとんでもない言葉を俺に放った。

「の、乗るッたって・・・」

驚きを隠せない俺はまだ頭の中の整理がうまくいってなかった。

頭上にたくさんクエスチョンマーク並ぶ。

目の前には明らかに選択肢の少ないライカード。

つばをひとつ飲み込むとそいつは俺をじっと見詰めていた。

「なんだよ・・・」

「ふうーん・・・お前『上総伊織』っていつのか」

「!?!?!?」

な、なんでこいつ・・・俺の名前を!?

「確かに・・・面影あるな」

「ど、どついう意味だよ?」

先ほどまで驚きで何も聞くことが出来なかったがこんど勝手に口が

開いて、言葉を発した。

足も一歩前へ踏み出していた。

「どつって……『上総椎名』はお前の姉だろ？」

「どつして……姉ちゃんの……名前を……」

なんで姉ちゃんの名前を知っているんだこいつは!?

こいつは何者なんだ!? 人間なのか?

プオオオオツ!

不意にあの汽笛が鳴り響く。

どうやら発進するようだ。

「なんだお前は乗らないのか……」

「お前』は……だと?」

こいつはまた意味深な言葉を発する。

そしてこいつが次に発した言葉に俺は耳を疑った。

「お前の姉は乗ったぞ?」

え？姉ちゃんが・・・なんだって？

「まあいいや」

こいつはそれだけ言い残して、そのドアの影から消え再び闇の中へ入り込んでいった。

姉ちゃんがこれに乗った？

意味が分からない。

何を言っているんだあいつは。

再び大きな汽笛をあげて完璧に走り出す準備をしていた。

蒸気機関車のドアは開いたままだ。

そして・・・走り出す。

姉ちゃんが・・・乗った・・・

ゆっくりと速度を上げて鉄をすり合わせながら俺を横目に過ぎていく。

姉ちゃんが・・・

力なくうな垂れていた右手の拳を握る。

乗る！！

「うううあああっ！」

そのままゆっくりと加速しだした蒸気機関車の横を並走した。

さっきまでドアが開いていた場所がある！！

そこまで行けばまだ乗れるはずだ！！

ゆっくりと加速したとは言え、すでに数メートル先まで進んでしまっている。

これからさらに早くなる列車に追いつける人間はあまりいないだろう。

「あつたあああっ！！！」

しかし俺は脚が早いんだ。

俺はドアの脇に取り付けられていた取っ手をつかみ、そのまま横を走る。

すでに遅いとはいえないほど加速している列車にしがみ付くので精一杯だ。

くっそお・・・

ッさらにさらに速度を上げいつの間にか、ホーム端まで来てしまっ

ていた。

やっべ・・・このままじゃ・・・

数十メートル先にホームは途切れ、それより先には真っ暗な闇が広がっていた。

くそ!!??早すぎる・・・

足がなんだか縛れそうになる。

だんだんと手すりをつかまる腕の力が抜けていくのが分かった。

俺は最後の力を振り絞って・・・

飛んだ。

「らあああつー！」

そのまま飛んだ体はドアに吸い込まれるようにして入っていきなんとか乗車」することが出来た。

床に寝転がりながら肩で息をしている俺を、遠くで先ほどのあいつが見つめる。

「ようこそ。シャットダウン・トレインへ」

そいつは俺に聞こえないように不気味な笑みを浮かべながらそうつぶやいた。

第八章

シャツシャツシャツ・・・

聞きなれない音と座席の下から体に伝わる振動が、本当にいつも乗っている電車ではないと改めて実感させられる。

進行方向に正対している座席に腰掛け、窓のスペースに肩肘を立てながらため息を吐いた。

「はぁ・・・」

何で俺はこんな電車に乗ったんだ・・・

姉ちゃんの名前を聞いて・・・心配になって・・・動揺して・・・

あの時ははっきりいって何も考えることは出来なかった。

姉の名前が出てきて、列車が出発した。

それを無我夢中で追い、死にそんな思いまでしてなんとか乗った。

乗ったはいいが・・・

「どこに向かってんだよ・・・」

考えれば考えた分だけ口からため息が零れてきた。

「おい」

ふと掛けられた声に気づき振り向くと、そこには先ほどの車掌がそこに立っていた。

表情はどこか気だるそうで、いかにも早くしろ見たいな顔をしている。

「乗車券を出せ、確認する」

左手が顔の前にずいと差し出された。

右手にはなにやら変てこな機械が握られていた。

「乗車券？」

「きつぷだよ、きつぷ」

「ああ」

そういつて気だるそうな説明を聞いて俺はこの車掌に買ったきつぷを渡した。

すると車掌は俺から受け取った切符を先ほどの機械に通す。

「な、にして……るんですか？」

何故か改まって敬語になってしまった。

「んだよその言葉遣い……気持ちわりいな……確認だツつったる？能力確認！」

「能力確認？なんだそれ？」

すこし頭にくる単語があつたが冷静に聞き流したことにして、疑問に思ったことをたずねる。

「あゝ・・・説明だるい」

「は？」

機械から渡したきつぷが出てきた。

「まあ目的地に着けば、嫌でもわかるさ・・・お！」

この列車に乗ってから分からないことだらけだ・・・

「へえ、四肢強化か！」

「ししきょうか??」

また分からないことが増えた。

車掌は俺から受け取ったきつぷを胸ポケットにしまつ。

「気にするな、それとこれがお前の得物だ」

そついうとどこから出したのか分からない物体を、座っている座席の横に乱暴に置いた。

「なんだよ・・・これ・・・」

ぱっと見、俺にはこれがなんだか分からなかった。

ボクシンググローブのように腕にはめるような形の物。

しかしそれは手の先から、ひじりまでの長さで手の甲側を覆うように金属の板が付けられている。

さらに……

「これ……本物？」

「勿論」

俺の目に留まって釘付けにしたもの。

それはこの物体のボクシンググローブでいうインパクトポイントと、手の甲、そして肘の先端辺りに白銀の刃が取り付けられていた。

そしてそれは対になって俺の目の前に置かれていた。

「……」

言葉が出なかった。

刃物なんて包丁かカッターのような細くて小さな刃が取り付けられたものしか見たことが無いのに、俺の目の前にある物体は、初めて見る大きさ、長さ、鋭さだった。

すこし触れてみるとそれは氷のように冷たく、持ち上げてみるとそ

れなりの重量がある。

だけど辛いような重さではなかった。

「これはブレード・フィンだ。それ使って何とか生き残れよ、空手部には丁度いいだろ、じゃあな！俺は仕事に戻るわ」

な、なんで・・・こいつは俺が空手道部だってことも！？

この物体を置いて俺に背を向けながら、先頭車両に向かっていった。

「おっと忘れてた」

くるっと振り返し、

「俺の名前はトレイン・マーク。能力は・・・スルー・アイ。眼部強化だ」

そっぴい残してそいつ・・・トレイン・マークは先頭車両に消えていった。

〈第九章〉

俺だけを残したこの車両に再び闇と静寂が訪れる。

「・・・」

手に取ったこの物体・・・ブレード・フィンを眺める。

トレイン・マークが渡したこれは・・・武器だ。

しかも簡単に人を殺せる。

ということはこの先の目的地はかなり危ないところってことだ。

なんだよこの展開、信じられない。

当たり前か・・・

いろいろなことが徐々に解決していく。

憶測でしかないが、すこしは気が楽になった。

ただ、いきなり人を殺すことなんて出来っこない。出来るはずが無い。

不安と安心が相互して俺の頭の中を駆け巡った。

それに・・・

あいつが言ってた最後の言葉……

眼部強化。

それってさっき俺にも言った能力強化見たいのもだろう。

だからあいつはその力……確かスルー・アイだったか。

きっと眼の力が強化されて、いろいろな事まで見えるのだろう。

それで俺の名前も、やっていることも分かったんだ。

てことは、俺の四肢強化ってやつもその名前の通り、体が強化されたってことか？

それとも身体能力か？

徐々に疑問が解決していった。

最後の残った疑問は、この四肢強化の力だ。

はっきり言って何が起ころのかはわからない。

想像は出来るがそれはやはり、想像でしかない。

試してみるか……

ゆっくりと立ち上がり、今まで座っていた座席に武器を置く。

そしてひとつ深呼吸をして、後ろの座席に正対した。

正拳は怖いな・・・

腕を前に突き出し、そのまま座席の背もたれに近づける。

ピンッ

グシャー!!

「!?!」

ま、マジかよ!?!

俺はそのまま近づけた拳で背もたれにデコピンをした。

すると、背もたれは音を立てて当てた場所が粉々に砕け散った。

これ・・・全力でやったら大変なことになってたぞ!?!

その座席を見て身震いした後、おとなしくしてようと座っていた座席に戻った。

よ、よし。能力は分かった。とにかく危ねえ。

これでまたひとつ疑問が解消した。

残る疑問はあとひとつ・・・

「・・・目的地はどこなんだ」

ガララッ！

「！？」

突然、車両間の連絡通路の扉が開く音が響いた。

どうやら正対する方向から響いてきたようだ。

俺は反射的に音がしたほうの扉に背を向けている座席の背もたれに身を隠す。

誰だ！？トレイン・マークか！？

しかし奴ならすぐさま声を掛けてくるがこいつは掛けてこない。

どうやらべつの奴らしい。

この列車に他の奴が乗ってたのか！？

ホームでは俺一人だったし、途中で止まった感じも無かったぞ！？

息を殺して静かにその反応を待つ。

数秒待った後、足音がこちらに近づいてくる。

一歩一歩近づくたびに心臓の鼓動が激しさを増していく。

くそっ！なんなんだよ！？この列車は！？

堪えていた息ですら、徐々に口から零れるように溢れ出してしまっ

ている。

「誰かいるのか？」

「!?(ばれた!!)」

零れた空気に気づいたのか、その人物が声を上げた。

どうやら人間の男のようだ。

ちっ……もう隠れても無駄か。

「……ああ」

俺は勝手に観念して隠れていた座席からゆっくりと立ち上がった。

視界に入ったそいつの外見は俺よりかはすこし年を取っているように見えて、深くニット帽を被り黒のスタジャンに灰色に色落ちしたジーパンを履いていた。

年齢的には20代の半ばから後半といった所だろう。

そして腰には、一本の刀が携えられている。

「今の音は？」

先ほどの背もたれを破壊したときの音を聞いたのか、かすれた声で聞いてきた。

「ああ……ちょっととした試してみたいなやつ……」

そして俺は後ろの席を親指で指す。

「試し・・・能力か・・・」

「あんたもトレイン・マークに会ったのか!？」

能力という単語に反応し俺は荒々しく声を上げた。

「・・・まあ落ち着けよ。俺は『あんた』なんて名前じゃない」

興奮した俺とは正反対に、冷静でいたそいつはゆっくりと近づいてきて、俺の目の前の座席に腰を落とした。

座りながら、こしの刀を座席の脇に立てかける。

「俺の名前は『杉弓吾朗座』すぎゆみろうざだ。年は26、整体師と副業で剣道の道場の師範をやってる」

ああ、だからトレイン・マークから刀を貰ったのか。

「お前の言うトレインなんたらとか言う奴にはあつてはいないが車掌の格好をした男には会った。これはそいつから貰ったものだ」

そういつて脇に置いてあつた刀を持つと俺の目の前に水平にしてかざした。

「これはクルーエル・ソード。その男から名前を聞いた」

「・・・」

車掌の格好をした男・・・トレイン・マークのことだな。名前は聞いていないのか。

杉弓は刀を見せ終わると、再びゆっくりと脇に戻した。

「何を黙ってる。俺が自己紹介したんだ。お前が自己紹介しないなんて失礼だぞ？」

いろいろと考えていた思考を杉弓は大人っぽい格言でそれを停止させた。

「あ、悪い・・・です」

一般常識くらいは分かっている。

年を知った俺は話し言葉を敬語に直した。

「俺は上総伊織です。年は17、高校生です」

「別に敬語じゃなくてもいい。俺は敬語が嫌いなんだ」

すこし機嫌の悪そうにそういつてきた。

「そ、うか」

別に杉弓にすかれないわけではないが敬語でなくてもいいならわざわざ使う必要も無いだろう。

「ちなみに空手道部に所属してる。これでも全国で結構は有名なん

だ
」

そして俺はブレード・フィンを杉弓に見せた。

「これはブレード・フィン。俺もあの男から貰ったんだ」

そうして武器を座席に置く。

一通り、自己紹介を終えた後に杉弓が不意に右手を出してきた。

「まあこれも何かの縁だ、よろしくな」

「・・・ああよろしく」

俺はその差し出された手を握り返した。

〈第十章〉

あれからどれだけ時間が経過しただろう。

俺と杉弓は自己紹介をした後、軽く世間話をして、お互いの持っている情報を交換した。

互いの能力強化も話した。

どうやら杉弓は風力。風を操る力らしい。後で紹介してくれるとのことだ。

俺も四肢強化のことは説明した。

2人ともあまり情報が無かったが、杉弓にはあの男のことを説明した。

そのおかげで杉弓もなんで俺の名前を知っていたのか理解できたらしい。

そして俺は杉弓からとてもありがたい情報を聞いた。

この列車の目的地までは知らないらしいが、トレイン・マークから聞いた事によると、少なくともよっぱどのが無い限り人間同士で殺しあうようなことは無いらしい。

ということとは、目的地に在るであろう敵は少なくとも人間ではないということだ。

ますますファンタジーな世界に入ってしまった。

魔物や怪獣などと戦うとでも言うのだろうか。

そして、もうひとつの情報……

この武器には特殊能力があるらしい。

それを今から杉弓に見せてもらおうところだ。

「まずは俺自身の力だ」

そういつて杉弓は刀を持っていない右手の平を胸元辺りで天井へと向けた。

すると、車内にもかかわらず頬をかすめる風を感じた。

その風は徐々に強くなっていき、次第に眼で認識できるほど濃くなっていく。

そして杉弓の手のひらの上に収束し始めた。

そして、手のひらの上に小さな竜巻が出来上がった。

「これが風力」

そう言つて手のひらの上が出来上がった竜巻を握りつぶす。

収束していた風は一気に霧散して、さきほどの倍以上の風の勢いが頬をかすめていった。

「そして・・・」

不意に腰にも携えていた刀を鞘から引き抜く。

「これが刀の力だ」

そういうと刀を下段の構えに直し、隣の座席に正対するとそのまま一気に右下から左上へ降り抜く。

標的になった座席が綺麗に4つに両断されていた。

「『一刀三迅』これが刀の力。一振りで三太刀分の斬撃を加えることが出来る」

そういい終わると納刀して再び座っていた座席に着いた。

「・・・すげえな」

完璧とまでは行かないが自分の力を理解していて、尚且つ使いこなせている。

俺は素直に驚いていた。

「さ、次は上総の番だぜ」

「ああ」

そういつて立ち上がる。

内心すこし緊張しているのは杉弓には内緒だ。

「……つてか俺、武器の特殊能力なんか知らないぞ？」

「なんだ知らんのか……武器をはめてみる。そうすれば『教えてくれる』」

教えてくれる？

この単語が気になったがとりあえず杉弓の言う通り武器を両手にはめた。

「!？」

「どうだ？教えてくれただろ？」

「……ああ」

それは、あつという間だった。

杉弓の言葉を聴いて武器をはめた途端、頭の中にその名前から、使い方まで一気に流れ込んできた。

文字通り『教えてくれた』

「俺の武器の力は……」

そういつて正拳の体勢をとる。

そして腰の円運動で一気に拳を前へ突き出した。

ズガガガガッ！

触れてもいないのに目の前の座席が塵のように、煙を巻き上げながら吹き飛ぶ。

「『弾裂空』だ」

「ほお」

弾裂空は拳を前に突き出し、そこに充満する空気を拳の勢いで発射する。いわば空気の弾を打ち出す力。

それは力が強ければ強いほど衝撃は強大になりまるで、空気を引き裂く弾丸を撃つかのごとくだ。

四肢強化で得た力と相性が良すぎる。

「まああとは四肢強化なんだけどここじゃ狭いし、そう壊してばかりいたらトレイン・マークに怒られそうだから目的地に到着してから紹介するよ」

そういつて俺は武器を外し、席へ着いた。

お互いの力を紹介しあった2人に心中はまったく同じことを考えていた。

仲良くなって良かった、と。

〈第十一章〉

あれから数時間。

この列車に乗車してから約3時間は経過しようとしていた。

俺と杉弓は軽い世間話を続け、年齢は多少離れているもなかなか話が合って、友人には成れた。

俺の学校のことや杉弓のこと家庭のことなど様々なことを話したり聞いたりしていたら自然と仲良くなれた。

ジジジ……

「おい……聞こえるか？」

一旦話が切れたときに、車内に不審な音が流れた。

その音にすばやく反応して杉弓が俺に話しかけてきた。

「聞こえた」

俺も立っていた肘をたたみ、そのわずかな音を聞き取ろうと耳をそばだてた。

『おい。俺だ。ここの車掌やってるトレイン・マークだ』

不意に聞こえてきたその声はどうやら車内に設置された拡声器から流れ出しているようだ。

さっきの音もきつとこれから流れてきたのだろう。

『もうすぐ目的地に到着する。ほんのちよつとでトンネル抜けるから外の景色でも堪能してな・・・ブツツ!』

そついい残すと拡声器からの音声は途絶えた。

「到着だつてよ」

「のようだな」

俺達は多少心配を胸に抱きながらも、もうすぐ見えてくるであろう外の景色を拝見するために、窓側の座席に身を乗り出した。

「お！上総、前見る。トンネル抜けるぞ！」

「ホントだ！久しぶりの太陽だぜ」

進行方向と正対して座っている杉弓がいち早く列車の前方から光が差し込んでいることに気がついた。

そして、列車はその光へと身を飛び込ませた。

「くー！」

「まぶしい！」

暗闇から一気に日の刺す明るみへ飛び出したため俺と杉弓は目を眩ませてしまった。

数秒目を閉じた後に俺は瞳を開く。

その目に飛び込んできたものは・・・

「・・・おい、杉弓」

「待て、まだ目が慣れておらん」

「いいから、見る。大変なところに着ちまったみてえだぜ・・・」

「ああ？」

そうして未だにまぶしそうにしていた杉弓はゆっくりと瞳を開けた。

「なん、だ・・・これは・・・」

「知らねえよ、俺に聞くな」

「別にお前に聞いたわけじゃない、俺の心に聞いたんだ」

俺達二人の目に飛び込んできた風景。

それは想像していたものとは全く違う風景だった。

列車の通るすぐ脇にはたくさんの木々が生い茂り、その木々の隙間から見える先には真っ赤な色をした海。

太陽の光だと思っていたものはなく空は暗黒の闇に包まれている。

空に浮かんだ二つの月のようなもの、ひとつは激しく真っ赤に発行し、もうひとつは白銀と光を放っている。

辺りの空気に色でもあるのではないのかと思ってしまっただけほど赤みを帯びていて、もはや朝とも昼とも夜とも呼べはしない。

本当に俺達はどこへ来てしまったのだろうか。

ここは日本なのか・・・いや、果たして地球上にこんな不思議で重々しい場所は存在するのだろうか。

通り過ぎていく風景はまさに空想の中の地獄を描いていた。

『ようこそ、放流世界シャツタウンへ』

再び拡声器を通して車内にトレイン・マークの音が響き渡った。

その声にはどこか喚起にも満ちた表情が含まれていた。

「放流世界・・・？」

「なんだよ、そのシャツなんたらって」

俺達はその拡声器の言葉に耳を傾けた。

『あゝ・・・ちなみにそっちの声はこちらには届かないんでよろしく』

「てめえ！説明めんどくさいからだろっ！...！」

『あゝ・・・聞こえませんが、どうぞ？』

「んのやろっ・・・」

「まあ落ち着け上総」

トレイン・マークのめんどくさがりな性格に苛立ちを覚えて、拡声器を粉々にしてしまいそうになったのを、杉弓が冷静にとめてくれた。

『えゝ静かになったところで、説明いたします』

(聞こえてるのかよ・・・というか説明するのか)

と、杉弓が心の中でつぶやいた。

『今のこの放流世界シャットダウンは現実世界で言う夜に値します』

俺はなんとか落ち着きを取り戻し座席に座ると再び拡声器の声に耳お傾けた。

夜か・・・これで朝だったら気が滅入っていたところだぜ。

『それと・・・あゝ・・・説明は以上です』

「殺す！！」

「落ち着け上総！」

再び説明を端折ったトレイン・マークに切れそうになった。

つつか切れた。

『最後にひとつだけ説明いたします』

すこし真面目になった声質に、俺も冷静になって立ったまま拡声器に耳を傾ける。

『死ぬなよ……ブツッ!』

「……」

「……」

辺りに静寂が流れた。

そして列車が徐々に減速していくのを肌が感じる。

鉄を擦り付けあう金属音と、その反動が重力となって伝わる。

俺達は会話を忘れてただ、列車の到着を待った。

〈第十二章〉

キキキッー！！

「着いたな」

「そう・・・みたいだな」

列車の前後への反動、制動の停止、そして窓から見える辺りの風景。

これらを踏まえて列車が停車したのが分かった。

俺の車両のドアが口をあけるように開く。

先ほどまではあれが怖くて怖くて近寄ることすら出来なかったが今はそんなことを言っている場合ではない。

ブレード・フィンを両腕に装着して座席を立った。

「お、おい上総。」

不意に後方から俺を呼び止める声が聞こえてきた。

杉弓が俺を呼び止めたようだ。

「なんだ？」

「行くのか？」

「当たり前だろう、ほかに何をするところがあるっつてんだよ」

「そうか……」

杉弓の表情はどこか恐れているのにも見て取れた。

無論、俺も怖くないわけではない。

むしろ杉弓よりも恐怖しているかもしれない。

だけど、ここで臆していてなにかが変わるわけでもなければ命の保障すらない。

それにこの列車だったずっとここに止まっているかどうか分からない。

むやみに移動するのは無謀だが、ここでずっと身を震わしているのも全く持って意味が無い。

俺はそう思って立ち上がったのだ。

杉弓もクルーエル・ソードを腰に挿して立ち上がり俺達は列車を降りた。

「なんだよこのジャングルは……」

目の前に飛び込んできた風景は、生い茂る木々と夜だというのに激しく騒ぎ立てる生命体の泣き声。

そしてなにより……

「原色ばっかだな」

赤や黄色など派手に明るい色をした植物がその身を集めていたのだ。無論、辺りを見回しても駅というのにふさわしいような施設は見当たらずも無い。

すでにその場で行くあてをなくした俺達は立ち往生してしまった。

ガサ・・・

「！？」

突然、右前方から草木を揺する音が耳に入ってくる。

武器を構え戦闘の態勢をとる。

杉弓を腰の刀に左手を添えて、いつでも抜刀できる体勢をとった。

辺りに緊張が走り、空気が張り詰める感じが肌を通る。

自分の心臓の音が生涯分の鼓動を使ってしまうのではないかとはいくくらい早く打ち鳴らしていた。

「ぶひぶひ」

張り詰めた緊張を破って聞こえた音はとても聞き覚えがあり、やけに憎たらしかった。

「なんだよ・・・ただの豚かよ」

草木から現れた生命体はピンクの肌を持ちよく肥えた生き物・・・豚だった。

「いや・・・どうみても、ただの豚じゃないぞ」

途切れた緊張の後に、杉弓が言葉を発した。

「え？」

「よく見てみるあれ・・・」

杉弓の言葉に不審を感じ再びよく目を凝らして豚を見てみた。

第十三章

「・・・気色悪い」

その豚は、その胴体と声こそは豚だが顔は明らかに魚顔で足には蹄鉄が付けられていない馬の蹄、尻尾の先にはライオンのように毛が丸く集まっていた。

俺と杉弓はその豚？から目を離せなくなっていた。

「か、上総・・・くん？」

「!？」

気を抜いていた刹那に後方から俺の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

驚いて体を震わせながら瞬時に振り向く。

緊張のせいが一瞬心臓がその仕事を放棄したかに思えた。

誰だ！？敵！？

振り向いた先にはどこか見覚えのある少女が立っていた。

「・・・篠崎？」

「そう！そうだよ！よかった、ひとりかと思ってた」

俺と同じ桐峰の制服を着ている少女が俺の顔を見て安堵していた。

こいつは篠崎。しのなきまいつ篠崎未来。

同級生で弓道部に所属している女学生だ。

威圧の欠片も感じない優しい瞳に潤みが掛かっていて、整った顔立ちにトップで束ねたポニーテール。小さな身長に控えめな胸は、実年齢より彼女を幼く見させている。

その小さな体には不釣り合いなほどの巨大な弓が背中に背負っていて、腰には二丁のごつい拳銃、左肩から右下に掛けて背負っている巨大な大筒を装備していた。

これが篠崎の武器だろう。

「お前なんでここに？」

なんでこいつがここに・・・

篠崎もあの列車に乗ったってことか？

当たり前前の質問を篠崎に投げかけた。

「多分、上総くん達と一緒に。変な電車に乗ってきたの」

そうか・・・篠崎も巻き込まれたのか。

どうしようもない憤りが心のそこに生まれたのが分かった。

「ところで篠崎・・・それ、重くないのか？」

「一目見たときからずっと不思議に思っていたことを問いかける。

そういつて俺は、篠崎の持っている武器たちを指差した。

「これ？ああ、多分トレインさんに聞いてると思うけどこれ私の能力」

篠崎もトレインにあったのか・・・

「私の能力はグラビティコントロール。重力操作だよ」

そういつてとても重そうな大筒を右手一本だ軽々と持ち上げてしまった。

「そういうことか・・・」

「一瞬、篠崎がゴリラ並みの力持ちなのかと考えたことは秘密にしておこじ。」

獲物で殺されてしまふかもしれない。

そう。俺は心に言い聞かせた。

第十四章

「私ね……」

どことなく不安を隠しきれない表情でゆっくりと口を開く。

俺には篠崎が次に何を言おうとしているのかが分かった。

その憂鬱そうな表情が何もかも語っていたから。

「うん」

だから俺はその不安を聞いて受け止めてやることにした。

それで少しでもこいつが楽になるのなら。

「いきなりこんな所に来て凄く不安なの……お母さんやお父さんも私がこんな目にあってるなんて知らないからきつと心配してると思うの」

俺はあまり篠崎と話したことは無い。

学校の廊下ですれ違っても挨拶なんてしないし、ただお互いが顔と名前を知っている程度だった。

でも俺の周りで篠崎と絡んでいる奴は多かったし、人当たりもいい篠崎はみんなから嫌われるような奴ではない。

風の噂で篠崎の家は家族がとても仲が良く良好な家庭だったという。そんな家庭が途端に娘がいなくなって心配する両親はいないだろう。少なくとも俺はそう思った。

そして篠崎のその言葉をきっかけに俺も家族がとても心配になってしまった。

どうやら姉もこの列車に乗ったらしいから姉弟揃って行方不明となるとどんな家でも心配するだろう。

家だって仲が悪いわけでもないしむしろ良いほうだ。

親父もいない我が家は母さん一人で俺ら二人を育ててきてくれた。

けどどうしようもないこの現状に何もで出来ずにここにいるしかないということが俺の無力さを物語っていた。

せめて姉の安否さえ確認できれば良いのに……

篠崎に話の途中で自分の心配を始めて実感していた。

「お母さんやお父さん……心配してないかな……」

「大丈夫だよ、みんなで力をあわせてここから帰ろう。それが俺達の目的だ」

肩をがっくり落としていた篠崎の手を取りそう言葉を掛ける。

手にぬくもりを感じたのか顔を上げて俺の眼を見ると頬を赤らめながら安心したようににっこりと微笑んだ。

その笑顔がとても可愛くて、手を握っていたことを忘れ、篠崎に釘付けになっていた。

「おい、二人で盛り上がっているところ申し訳ないのだが俺を忘れていないか？」

ふと後ろから、期限の悪そうな声が入る。

完璧に忘れていたよ杉弓。

「あ、わ、悪い・・・」

慌てるようにして篠崎の手を放すと、杉弓の方へ振り返り軽く頭を下げた。

「紹介するよ、こいつは俺と同じ高校に通う篠崎未来」

そして、二人が向き合っている間に入り篠崎に手をさして言う。

「こんにちは、篠崎です」

篠崎もそれにあわせるようにして軽く会釈する。

「んでこっちが杉弓吾朗座。さっき列車の中で知り合っただ」

こんどは手を逆に向けて杉弓を紹介する。

「杉弓だ、よろしくな」

篠崎の綺麗でか弱い手と、杉弓のごつくて硬い手が合わさり紹介が
終わった。

〈第十五章〉

紹介が終わってとりあえず、移動しようとなった今、俺たち三人は原色にまみれる派手なジャングルを少し警戒しながら歩いている。

先刻から三十分ほど歩いたのだが、町や村どころかこのジャングルの抜ける気配すら感じられなかった。

「長いですね、このジャングル」

「そのようだな、終わる気配が全く無い」

「いきなりこんな所によこして、何させようってんだよ」

それぞれに愚痴を零し薄明るいジャングルを歩く。

すれ違うものは木々しかなく、そろそろジャングルも飽きてきた頃だ。

ガササ！

「なに！？」

「しっ、敵かも知れん」

「まじかよ！？」

急に耳を突いたその音に俺達は警戒を高め、それぞれの武器に手を

掛ける。

「ガールル・・・」

「ゲウウウ！」

音がした草陰から現れたのは、狼のような頭部を持った生き物。

腓液を垂らし明らかに獲物を見つけたような目でこちらに歩み寄ってくる。

数は・・・三体だ。

ただこの狼どもの背中には白い翼が生えていて、その体を浮かすには十分な大きさをしていた。

「くそっ、化け物じゃねえか」

「俺はこんなところでは死にたくないぞ」

「私だって家に帰るんです！」

それぞれ、武器を構え歩み寄ってくる狼に対して臨戦態勢をとる。

運良くそれぞれが武道に通じているのでさほど戸惑うことも無く対処することが出来た。

ただ、俺と杉弓は対人の武道に対して篠崎は弓道。

対人ではないことはおろか、武道をたしなむるとはいえ女だ、心

配が心によぎってしまった。

「篠崎・・・大丈夫か？」

「大丈夫ですよ、怖いですけどこんな状況で弱音なんて吐いてられません」

俺の心配は、ただの心配に過ぎなかった。

そのまなざしは、とても鋭く強い意志が宿っていた。

そうか・・・武者たるもの己の腕に自信を持っていなくては成長なし。

その言葉を再び実感させられることになるとはな。

「上総！篠崎！相手は丁度三匹だ。それぞれ離れすぎないように辺りに散らばれ！無事倒してまたこの場所に戻ってくるぞ！」

「おうー！」

「はいっー！」

杉弓の怒号に反応して生き残ることを誓うと、杉弓はすぐさま反転してその場から駆け出した。

その後を追って。一匹の狼が杉弓の後を追っていく。まるで一対一でやり合つことを分かっているかのようじ。

「目印はあの蔦の巻かれている木だ。無事を祈る」

そういつて杉弓の姿はジャングルの木々にはさまれた奥に消えていった。

「俺達も生き残ろう！絶対帰って来いよ！」

そういつて俺も駆け出す。

無論狼は一匹だけ追ってくる。

敵ながらもその知識があることには敬意を表する。

「はいつ！上総君も！」

篠崎も俺と反対の方向に駆け出し、一匹の狼を連れてジャングルの中に姿を消した。

必ず生き残る。

この思いを胸に俺も木々生い茂るジャングルへと駆け出していった。

第十六章 杉弓吾朗座

木々生い茂るジャングルを駆け抜ける。

前方に現れ進行を遮る、草木を俺の刀『クルーエル・ソード』で切り落としながら、駆けて行く。

後ろに目を移すと、先ほどの狼の群れの一匹が荒い息を吐きながら、ところどころで唾液を垂らし追いかけてきているのが目に入った。

「どうやら、動物ながら多少の知恵はあるようだな」

先刻の作戦は一種の賭けだった。

もしあの場で駆け出した俺に三匹の狼が群れを成して襲ってきたらたちまち俺は奴らの餌になっていただろう。

しかし、敵としては背後を取られるのは致命的。

俺の危険性は高まるが、背後から上総と篠崎が奇襲を仕掛ければ奴らは終わっていた。

しかし、単独で追ってきたとなるとそれを理解していたのかはたまた、ただ分からなかっただけかは知りえないが、正しい判断を選択したことになる。

あとは俺がこいつを蹴散らし、みな無事である場所に合流できれば、まったく問題は無いだろう。

俺は上総と篠崎の腕を信じてあの行動を取った。

列車で聞いた事によればこの狼が超人的な能力を持っていない限り上総は負けないであろう。

篠崎も女性ながらこの苛酷な環境についてくる精神の持ち主だ。

俺の心配には及ばないだろう。

そして俺は、掛ける足をとめる。

「さてと。そろそろやりあうとするか、犬っころ」

刀を鞘から抜き取り反転して、中断に構える。

「グウ!？」

それを確認した狼も掛ける足を止めた武器の間合いのギリギリ外で止まった。

ちっ、こいつ犬の癖にこの武器の間合いが分かっているのか？

あのまま突っ込んでくれば頭を切り落としてやったのに。

二つ目の作戦は悉く失敗に終わり、俺達の戦いが始まった。

「グウウ・・・」

半身の状態で狼は刀の間合いの外を様子を伺うようにしてある一定

の距離をとり俺の周りを移動している。

ふん、犬の分際で頭の切れることだ。

痺れを切らし、俺は右手の平を宙に向ける。

風を収束させ、小さな竜巻を手の上に発生させる。

「くらえ！」

そのまま、竜巻を狼目掛け放った。

地面の草木をなぎ倒しながら、目に見える風の力が狼へと突進していく。

「ガウ！」

「!?!」

すると狼が背中の翼を羽ばたかせるのが目に飛び込んできた。

あの羽は飾りじゃないのか!?

そのまま狼は翼を羽ばたかせ宙へと飛び上がった。

「ガア！」

そのまま間髪入れず、牙の輝く口を大きく開く。

「?」

その状態から何が出来・・・

「グアウ！」

「!？」

その口から真っ赤に燃え滾るバスケットボール大の火球が放たれた。

何！？

右手を刀にかざし風力を刀身に宿す。

風を帯びた刀で向かってくる火球に対して構えた。

「うらあ！」

そのまま、水平に切り抜き火球を弾き飛ばす。

風と衝突し爆煙があたりに立ち込めた。

くそっ！前が見えない！

立ち込める煙をいくら掃っても宙に舞っている狼の姿を目視する
ことは出来なかった。

「ガアア！」

「なっ!？」

不意にその煙を引き裂いて、正面から狼がその大きな口を開いて突進してきた。

キーン！

刃と牙がぶつかり合う音が響く。

体制を崩しながらも刀を顔の前で水平にして何とか受け止めた。

しかし体が後方へ、倒れこむ。

地面へ伏したらさすがに危険だ。

そのまま倒れこみながらも刀身を左側方へ引き流しながら攻撃をかわす。

反転して地面に右手を着いて、なんとか転倒は持ちこたえた。

「グルルル・・・」

刀を口で受け止めたせいか狼の口からは少量の出血が見て取れた。

しかし全くひるんでいる様子が無い。

さすがにきついかこれは・・・

柄を握る力を強め、再び刀を構えた。

〈第十七章〉杉弓吾朗座

緊迫の空気が辺りに流れる。

狼の足元に垂れる腠液と血液。

額に感じられるほどの殺意と緊張の汗。

分かつてはいたがこの狼やはりただの狼ではない。

無意識に刀を握る握力が強くなってしまっているのが分かった。

上総たちが心配だ・・・いや、今は人の心配をしている猶予は無い
か。

刀を握る力を弱音肩の力を抜く。

量目をゆっくりと閉じる

ひとつ大きく息を吐き、両の目を開いた。

かたをつける！！

後方から風力で追い風をふかし、その風に乗って一気に加速する。

「せいやー！」

驚きでびくりとも動けなかった、狼に一太刀浴びせる。

寸前で側方に交わすも斬撃が狼の後ろ足を捕らえた。

「キャン！」

一刀三迅の刀が狼の後ろ足を骨から切り落とし、細切れにした。

動力部を失った狼は立ち上がるのがやっとのことで切り落とされた脚部からは多量の鮮血が零れだしている。

「終いだ」

そのまま反転して逃げ出す狼の眼前に風力で移動し、刀を振り上げる。

ズシヤヤ！

振り下ろされた刀は狼の胴体を切り裂き、血で刀身を赤く染め上げる。

狼の体は多量の血液と内臓を噴出して痙攣しながら、地面へと倒れこんだ。

胴体から切り離された頭部は大きく口を開いて泡を吹きながら、ぴくりとも動かなくなった。

「よし、終わった。上総たちが心配だ」

刀に付いた血液を振り払って落とし、鞘へ納刀する。

そのままと来た道に戻って、俺の伝えた場所へと向かった。

第十八章 篠崎未来

「はぁ・・・はぁ・・・」

杉弓さんが狼を分断する作戦を立てて、それぞれ分かれてからジャングルを駆けていました。

私を追ってきた狼もそうですが、みな背中には翼が生えていてその体を浮かすには十分な大きさです。

息を切らしながら私は、ジャングルを駆けて抜けていく。

そろそろ戦わなきゃ。

ぴたりと走るのをやめ、後方へ振り返ると激しく吐息を漏らした狼が後からやってきた。

「私はお母さんやお父さんのもとに帰る！」

そつ心に言い聞かせて、腰の拳銃を引き抜く。

駆けてくる狼は速度を緩めることなく、翼を羽ばたかせながら飛び掛ってきた。

十メートルほど離れているのに飛び掛ってくるなんてやはり犬なんですね！

二対の銃を狼に向け、引き金に指を掛ける。

ダダン！

その刹那！

狼が発砲に気づいたのか空中で翼を羽ばたかせ横へ交わした。

覚悟は決めたつもりでしたが、初めて銃を発砲したため、その衝撃に耐えられず後方へと倒れこむ。

「きゃ！？」

そつだ重力操作でこれもコントロールしなきゃ！

そつ頭をよぎり、襲ってくる狼の攻撃を前転して何とか交わす。

これでも運動ほ大得意でしたので！！

そのまま、すぐに反転して双銃を眼前に構える。

まだ地面に着地していない狼を視界に捕らえて引き金を引く。

ダダン！

やった！？

双発の弾丸が狼目掛け襲い掛かっていく。

ギン！キン！

しかし弾丸は狼の肉を貫くことなく、その寸前で何かの力に弾かれて地面へと墮ちた。

「うそ！？なんで？」

悠々と地面に降り立つ狼はゆっくりと反転してこちらを見据えている。

ふと、狼の足元に目を移したときその周辺の草木が風でなびいているのが見えた。

まさか・・・

私はまだ確信には至らない憶測を胸に抱きながら立ち上がり、その確信を確かめるため背中中の巨大の長弓を構える。

弓籠から一本の矢を引き抜き、弦にめかけ引く。

この確信が確かなら、私にも考えがあります。

そう思い矢を全力で放つ。

しかし、標準はすこしずらして。

一直線に狼の左方へ向かっていく矢。

それは狼の横をすれ違う瞬間、少し方向を変えて狙った木とは別の木に突き刺さった。

私は腕には自信があります。

これは・・・あの狼の周りに纏うようにして風が吹いているのでしよう。

私は長弓を背中に掛けて、再び双銃を握り締める。

さあ勝負はこれからです！

第十九章 篠崎未来

悠然と立っていた狼が地面の砂を蹴り飛ばして向かってくる。

寸前でそれを交わして反転し、再び双銃で弾丸を放つ。

しかし、最初とはすこし変えて・・・

私はけして無駄球は撃ちません。

狼は何も気づかず、再び風の壁で弾丸を受け止めようとする。

ズギャン！

「！？キャウン！？」

弾丸は風の壁を貫き、狼の尻尾に風穴を開けた。

確実に息の根を止めるために放ちましたが・・・あの壁も柔ではないようですね。

狼は翻りながら、尻尾痛そうにして地面へと着地する。

何も分かっていないようですから伝えてあげましょう。

まあ人語を理解できるかどうかは知りませんが。

「私の武器の能力は『インパクト・コントロール』。その形状を様

々に変えることが出来ます。今のは弾頭を通常より細く鋭くしました。これで風の壁も貫きます!」

そう言い放って再び弾丸を放つ。

しかし、空気を裂いて突き進んだ弾丸は今度は狼のかぜの壁に阻まれ地面へと落ちた。

どうやら壁を分厚くしたようですね。

それなら!!

狼は弾丸を叩き落して、空に舞い上がりながら突進してきた。

「くっ!?!」

反応が遅れ直撃は免れるも、地面を削って飛んできた石が足にかすめ出血する。

「これしき・・・上総君に心配は掛けられないの!!」

そういつて弾丸を放った。

インパクト・コントロールで弾丸ほ刃のように薄くして放つ。

狼の側方から向かっていく。

ズシャヤア!!

「ギャン!?!」

弾丸は風の壁を切り裂き、失速することなく狼の側方から両前足を切断した。

体制を崩して地面にのた打ち回る狼。

両前足からは夥しい量の血液が流れ出ていた。

「せめて楽に逝かせてあげます」

そう言い放ち背中の大筒を構える。

そのまま痛みで苦しむ狼に向かって砲弾を放った。

爆煙が立ちこめ、狼の悲鳴が聞こえなくなる。

「お母さんお父さん、私は無事です。どうか心配しないで・・・必ず帰るから」

私の帰りを待つてくれている両親に言葉を伝えたくとも叶わない。

せめて今は上総君の役に立ちたい。

そう思って杉弓さんの言ったもと居た場所へと足を進めた。

〈第二十章〉上総伊織

「姉ちゃん……」

ジャングルを駆け抜けながら不意に口を突いて言葉が出てきた。

さっきは篠崎たちと一緒にもとの世界へ帰るために決意はした。

そのために俺は姉をまず見つけてから帰る方法を探そうと思っていた。

だけど姉が心配なことに代わりはなかった。

きつと姉も俺らと同じくトレイン・マークから武器と能力は貰ったと思う。

でも、俺らとは違って武道には通じてない。

その点、篠崎と違って普通の女学生だ。

心配過ぎる。

「ガウッ……」

「うお……」

色々と考えていたらどうやら狼に追いつかれてしまったようだ。

攻撃は俺の頭上をかすめあたらなかったものの、狼に前方をふさがれこれ以上逃げる事が出来なくなってしまうた。

「追いつかれたか・・・まあ、これだけ逃げれば杉弓や篠崎は大丈夫だろう」

俺は武器を構える。

「さあ、やり合おうぜ」

狼と向き合い、俺達の戦いに火蓋が切つて落とされた。

「おらあ！」

地面を蹴り、砂を巻き上げて一気に間合いを縮める。

そのまま振りかぶった拳で狼に殴りかかる。

ズシャアア！

だが、その拳は空を斬り地面の砂を削るだけだった。

狼は翼を羽ばたかせながら後方へ飛びのいていた。

「案外早いのかな」

突き刺さった武器を引き抜き再び構える。

今ので分かった。

むやみに突進して攻撃してもあたらない。

間合いを見切って一撃で仕留めるしかないか。

拳に冷静を送り込んだその時だった。

「ぐっ!？」

狼が短い前足を横へ振りかぶったかと思うと、いきなりその爪が伸びて斬撃が左から襲ってきた。

なんとか、武器でその攻撃を受け止めるも、少し気を抜いていたのが重心が浮いていてそのまま右へ弾き飛ばされた。

バキイイ!

そこらに生えた木に激突して、折倒しながら止まる。

「・・・化けもんじゃねえか」

服に付いたほこりを払いゆっくりと立ち上がる。

へえ・・・四肢強化って体も強くなるのか・・・

どうやら吹き飛ばされて木に衝突したようだが常人なら骨折は免れなかっただろうが、俺は無事なようだ。

むしろびくともしない。

肩を鳴らして、その場で軽く二、三回ジャンプする。

そして、片方の拳を突き出して、息を吐いた。

「さてと・・・お前は相手が悪い。なんせ桐峰のナンバーツーを相手にしてるんだからな」

殺気も織り交ぜて、その言葉を口から吐き出す。

気のせいか、辺りの木々がざわついたのを感じた。

く第二十一章く上総伊織

辺りでざわつく木々。

まるでそれぞれが会話をしているかのように、それは鳴り止まない。突き出した片方の拳の先に伝わる軟い風。

俺の放ったさつきを周りに伝えるかのように吹きすさぶ。

「どうした？来いよ犬畜生」

「ガ、ガウ！！」

動物に人語が理解できるのかどうかは知らないが、この狼は俺の挑発に乗って地面の砂を巻き上げた。

翼を羽ばたかせ、人の身長ほどの高さを低空飛行しながら向かってくる。

俺もすかさず地面を蹴った。

「ガ！？」

目にも留まらぬ速さで地面を駆けて狼との間合いを一気に詰めた。

狼が俺を視界から取り逃がし、一瞬空中で体が強張る。

「ここだよ」

俺は低空飛行する狼の腹部の下に移動した。

「うらあ！」

「ギャン！」

そのまま片手で地面を弾き、ロケットが撃ちあがるように狼の腹を蹴り抜く。

狼は口から多量の血を吐き、重力に逆らいながら空中へと飛び上がる。

まだまだ、だぜ

蹴り上げたままの勢いで、空中へと舞い上がり狼の上部へすばやく移動する。

「四肢強化をなめるなよ？」

そのまま足を振り上げて、俺の速さに全く反応できていない狼の後頭部に踵落としをお見舞いする。

地面へと一直線に落下して行き、凄まじい轟音とともに砂埃を巻き上げた。

「抜かりはしねえ！」

踵落としを放って腹部を地面に向けた俺はそのまま拳を振り上げる。

そして地面に向かって一気に弾空裂を撃ち放つ。

砂埃の掻き消えないまま、再び大きな衝撃とともに砂埃が舞った。

「どうだ？」

俺は砂埃からすこしはなれた場所に着地する。

次第に砂埃が晴れると、そこには何とかして立っている傷だらけの狼の姿が目飛び込んできた。

「案外タフなんだな」

「・・・ガウウ！」

狼が最後の力なのか、両前足を振り上げ爪を伸ばしてくる。

「ふん」

両の拳を前に交差するように突き出す。

すると、爪はその寸前で擦れあうような音を上げて停止した。

「この拳の前に空気の壁を作って受け止めた・・・次で最後だ」

ギリギリと擦れあいながら停止している爪。

俺は交差していた拳を一気に開く！

開放の勢いで爪は両サイドに開かれた。

俺はその開かれた道を地面を蹴って突き進む。

一瞬で狼との間合いを詰めた。

爪はまだ開ききったままで、閉じることはおろか爪を戻すことすら出来ていない。

「死にな？」

そのまま拳を振りかぶり、弾空裂とともに打ち抜く。

狼の腹部に拳大に風穴を開けて、肉片、内蔵ともども狼の体から弾き出した。

胴体に風穴を開けられた狼は瞳をグルンと上部に反転させてその場に倒れこむ。

完璧に絶命した。

あれで助かるはずが無い。

「みんなは無事かな？」

その死体に見向きもせず、元居た場所へと向かっていった。

〜第二十二章〜

鬱蒼と生い茂るジャングルを歩き進んでようやく先ほどの杉弓が指定した場所に到着した。

「お待たせ」

そう投げかけたのは、俺より先に杉弓と篠崎が集合場所に到着していたから。

蔦の絡み合う大木の下で杉弓は寄りかかりながら腕を組み、篠崎はその大木の根元に腰掛けていた。

「無事だったか」

「よかったです」

当たり前だと微笑みながら言葉を返すと、篠崎の足の怪我に目がいった。

「篠崎！その足大丈夫か!？」

駆け寄るようにして篠崎の足元にしゃがみこむ。

少量とはいえないほどの出血をしている足を見てつい声を荒げてしまった。

「大きな声を出すな!」

その声を聞いて杉弓が辺りを見回しながら注意をする。

「わ、わりい」

「私は大丈夫ですよ、上総君……」

そうは言うものの、その周辺を摩っただけで少し顔を歪めているのが分かった。

「痛そうにしてるじゃないかよ、ちよつと待ってる」

そういつて俺は、部活中に痛めた手首の包帯をすばやく解く。

四肢強化のおかげかどうかは分からないが、この列車の乗ってから全く痛みを感じなくなっていた。

「え？上総君！？そんな……悪いよ」

「怪我人がそんなこと気にするな、俺は大丈夫だから。それよりばい菌とかはいつたら大変だろ？」

すべて解き終え、少し砂で汚れてしまっている包帯を叩く。

女に汚れて汚い物を渡すほど無神経じゃないからな。

そして、桐峰のブレザーを脱いでワイシャツの端を口で引き裂く。

「水かなんか持ってないか？」

そう言っつて篠崎と杉弓の顔を見るが二人とも横に首を振ってしまっ

た。

「しょうがない・・・ごめん、篠崎。ちよっと沁みるぞ」

その言葉を投げかけてワイシャツの切れ端で足首の傷口を静かに摩る。

「ん・・・」

痛みを堪えるような表情をしながら小さく声を零す。

血をふき取った後再びワイシャツの端を切り裂き、その端をガーゼ代わりにして傷口に当てて包帯を巻いていく。

「手馴れているな」

横から俺の応急処置を除いていた杉弓が声を上げる。

「空手部だからな、テーピングくらいは自分でやれなきゃしょうがないだろう」

そついつて包帯を巻き終わると端と端を結びとめる。

「これではい菌は何かなるだろう」

「あ、ありがとう・・・」

ゆっくりと立ち上がり篠崎の顔を見ると頬を赤らめながらお礼を言った。

そして篠崎もゆっくりと立ち上がり足の調子確かめるようにすると、問題なかったのかにつこりと微笑んで再びお礼を言った。

「さてと、応急処置も終わったところで次はどうするか」

杉弓がもたれて木から体を起こすと刀を腰に収めながらそういった。

「どうしましょう・・・」

篠崎もそれぞれの武器を背負い口を開く。

俺は少し考えて・・・

「ここはリーダーを決めよう」

そう答えた。

「リーダー？」

二人は全く同じタイミングで息もぴったり合わせながら不思議そうに言葉を漏らす。

「ああ、状況が分からない今、判断を誤ったりするのは危険すぎる。だからリーダーを決めてそいつに判断を煽ろう。そいつが出した判断が正しいかどうか分からないけど、すくなくとも居ないよりかはましだ」

そう説明すると二人は黙ってしまった。

「杉弓、あんたがやってくれ。さっきの判断は単独行動をして危険

にはなつたがあの状況でみんなに伝える判断力と行動力は正直俺には出来そうもない。俺はあんたが適任だと思う」

本当のことだ。

確かにあの作戦は、かなり危険だったが生存率はかなり高い作戦だ。三人いっぺんに戦ってお互いを攻撃しあってしまう危険もないし、狼どもに集団で襲われることもなかった。

「・・・」

俺たち三人、輪になって話し合いをしている。

今、敵から襲われたらかなり危険だ。

「杉弓さん、私からもお願いします」

「・・・分かった、やろう」

杉弓が決心したように俺の提案を受け入れてくれた。

「ありがとう」

そういつて俺も両の手に武器をはめ込んで再びその場を出発した。

杉弓の掛け声とともに俺達は辺りへの警戒を怠らないように、その音の聞こえた方角へ駆けて行った。

少し、木々が開けた場所。

二つある月の光が差し込み明るくなっている場所に俺達は出た。

そこで俺達は、信じがたい光景を目にした。

「な、なんだありゃあ・・・」

「・・・うそ」

「なんてことだ・・・」

そこに広がっていた光景は、辺りの木々よりも数段巨大な体軀をした大きな化け物が居た。

頭部には何層にも擦れ上がったとても太い茶色の双角。

顔はどんな生き物にもたとえようのない、恐怖すら覚える悪魔のよ
うな顔。

その巨大な凶体を支えるには十分すぎるような筋肉。

一振りでも本も木々を薙ぎ倒せそうな太い尻尾。

まるで、悪魔だった。

しかもその化け物の両手には、片方に人間の上半身、もう片方にその人間のものであろう下半身が引き裂かれたように、握られていた。夥しい量の血が、化け物の足元に血の海を作っていて口元には血痕が染み付いている。

明らかに手に握られている人間だけの血の量ではなかった。

「うっ……」

篠崎がそれを目の当たりにして、口元を手で押さえる。

しかし、その行動は全く意味を成さず反転して後ろの木の根元に向かって走り出し胃の中にあつたものを吐き出してしまった。

くそっ！！？何なんだよこれは俺だって吐き気を堪えるので精一杯だぞ……

襲ってくる吐き気を何とか堪えるもその化け物の威圧は全身の汗を一気に引き取らせるものだった。

「グゴオオオオ！！」

両手を左右に大きく開き、天を仰ぐようにして化け物が凄まじい轟音でほえる。

その勢いでり両手の人間を一気に握りつぶした。

大量の血液が辺りに飛び散り、景色をいっぺんに真っ赤に染め上げた。

「うっ！！篠崎！見るな！」

その風景に堪えられず、目を篠崎のほうに反らして叫ぶ。

「いや・・・いや・・・」

しかし一歩及ばずその風景を見てしまった篠崎はその場に力なくへたり込んでしまっていた。

「上総・・・こいつはやべえぞ・・・」

ちくしょつと叱咤を零すと、隣から杉弓の声が聞こえてきた。

目をやると杉弓の腕は痙攣してしまっただかのように震えていた。

〜第二十四章〜

杉弓の目は完璧に飛んでしまっていてこちらを向いてすら居ない。

「とりあえず今はこの場から逃げよう、まだあの化け物は俺達に気づいてねえ!!」

そういつて化け物に視界を奪われていた杉弓の眼前に割って入りなるとか正気を取り戻させる。

「あ、ああ」

無事震えが止まった杉弓はしっかりと俺の目を見ていた。

「よし……今のうちに……」

「た、たすけてくれええ!!」

走り出そうとした瞬間、俺の後方から人間の男の声が響き渡ってきた。

「!?!」

その声に反応して振り向くと、化け物の足元で片足を引きちぎられて地面に伏している男が目に入った。

「ゴオオオアアア!!」

その声に気づいた化け物が岩石のように巨大な腕を天に振りかぶる。

足元で動けず俺らに助けを求める男。

俺はあいつはもう助からないと、思ってしまった。

「頼むっ！お前達！！助けてくれ！！助け・・・」

「グガアアアア！！！」

俺は目を反らした。

反らす瞬間、男と目が合ってその目には大量の涙が浮かべられていたのが分かった。

その声は化け物の叫び声とともに聞こえなくなった。

助けを懇願する男に化け物の拳が降りかかる。

男の周りの土砂とその血液があたりに円形に霧散する。

強烈な圧力によって押しつぶされた男の内臓は跡形もなく消え去ってしまった。

「うわああああ！！！」

次の刹那、辺りに篠崎の声が響き渡った。

それと同時に無数の弾丸を撃ち込む銃声が俺の耳に飛び込んでくる。

「バカッ！！やめろ！！」

「グルウウ??」

篠崎が化け物に向かって発砲してしまった。

俺の制止の声すらも耳に入っていないく、狂気に駆られたように狂ったように双銃を乱射していく。

しかし、放たれた弾丸は化け物の肉を捕らえるもすべて貫くことは叶わず、弾かれている。

「篠崎！！聞こえないのか！？やめろお！！」

「あああああぁっ！！」

そばに駆け寄ってしゃがみながら打ち込んでいる篠崎に話しかけても全く反応すら示さない。

杉弓も駆け寄ってきて静止を試みるが聞こえてすら居ない。

「スーーーーー！！」

化け物が完璧にこちらに気づき、背中を反らし胸を張りながら大量の空気を吸い込む。

「ボオアアア！！」

そのまま肺に送り込んだ空気を俺達に向かって一気に吐き出した。

「うわ!？」

「ぐっ!!！」

「きゃあ!？」

俺と杉弓はものすごい風圧でその場から吹き飛ばされ、数メートル後方の木に激突し、止まった。

篠崎はすぐ真後ろにあつた木に激突し、その衝撃で銃を手放してしまった。

「がはっ、ごほっ!！」

感じたこともない衝撃が背中に走って、嗚咽と一緒に血液を吐き出す。

隣に目をやると、気に激突した衝撃で後頭部を殴打し血を流しながら気絶している杉弓が目に入った。

「うっ……く、そお……すぎ、ゆみ……」

痛みに堪えながら何とか移動し、杉弓に声を掛けるが返事はない。

杉弓のそばで倒れながら手首の脈を確かめると鼓動しているのが確認できた。

「死んでは、ない……」

何とか体を起こして木に寄りかかって篠崎のほうに目をやる。

木の陰に隠れ、左半分の体しか見えなかったが横に手を突いた左手が震えていたため意識があることは確認できた。

〈第二十五章〉

「篠崎……にげろお!!」

声を振り絞って言葉を投げかける。

「あ……あ、あ……あ、」

しかし、体を振るわせるだけでその場から動く気配がない。

不意に化け物が大またで徐々に近づいていくのが目に入った。

「し、のざきい!……俺の声を、聞けえ!」

全く反応を示さない。

「グルウウ」

遂に篠崎の眼前まで巨大な化け物が来てしまった。

「あ、……い、いや……」

恐怖に打ち震える体は全く篠崎の言うことを聞いてくれない。

化け物が再び、その大きな拳を天に振り上げる。

「やめろ……やめてくれ……」

体に鞭を撃って何とか立ち上がる。

どうやら骨折などはしていないようだ。

化け物は振り上げた拳に力を込める。

「お父さん・・・お母さん・・・」

そして、拳を放った。

「やめろおおおお！！！！」

ズガアアアアン！！

拳が篠崎に振りかざされた。

砂煙が轟々と立ち込めて辺りの視界を奪う。

俺は何故か体の痛みが消えていた。

次第に砂煙が晴れる。

「グロオ？」

「か、ずさ……くん？」

晴れた砂煙の中で篠崎と化け物の拳の間に割って入り、空気の壁を左手の前につくり拳を片手で受け止めた。

化け物がゆっくりと拳を引く。

「無事か篠崎？」

「は、はい……」

真っ直ぐと俺を見ている瞳は正気で、そこに涙を浮かべていた。

「下がってる、杉弓を起こしてくれ」

そういうと篠崎はゆっくりと立ち上がり銃を拾って杉弓のもとへ駆け行って行った。

「てめえ……篠崎を、泣かしてんじゃねえぞ」

空気の壁を解除して左手を下ろす。

「グガガアアア！！」

化け物が再び叫んだ。

そして拳を振り上げる。

「ただの力しかねえ下等な種族に癖に……」

そのまま拳を放ち、俺に一直線で向かってくる。

ズガアアン！！

だが、拳は空を切り俺の足元の土砂を空中へ巻き上げただけだった。その場から一瞬で移動し、地面に突き刺さった巨大な腕を駆け上げる。

「いきがってんじゃねえ！！」

肩まで駆け上がり左頬へ、ストレートを打ち込んだ。

「ブルオオ！！」

攻撃の衝撃で巨体はバランスを崩し、反対方向へ倒れこむ。

大量の砂煙と土砂を巻き上げて倒れた。

「上総君・・・すごい」

「ああ・・・味方でよかった」

篠崎の呼びかけで目を覚ました杉弓達は驚きを隠せずに居た。

「グラー！グラー！グラーアッ！！」

化け物の表情が明らかに憤怒に満ちているのが分かった。

牙の無数に生えた口を大きく開く。

その目の前に、光に収束が確認できた。

円状に徐々に巨大化しているそれは交わしたら篠崎たちに被害が及ぶことは明らかだった。

俺は右手を後方へ下げるようにして構え、その前で弾裂空を収束させる。

「あいつ！あれを迎え撃つ気なのか！？」

「上総君は私達に被害が及ぶんじゃないかって考えてあの行動を取ってるんです。上総君は周りのことを第一に考える人だから・・・」

「お前達ってそんなに絡んだことないんじゃない・・・」

「ありませんよ、上総君はうちの高校では人気者です」

化け物と俺の攻撃が肥大化していく。

「だから、上総君はそのみんなと仲良くはなれません。私もその一人です」

そして、最高潮までパワーを蓄積した。

「でも・・・」

そして、一気に放つ。

「うづらあぁあ！・・・」

「グガアアア！！！！」

弾裂空とエネルギー弾が衝突した。

「私は上総君のことが好きですから」

〜第二十六章〜

すべてを打ち砕くべく放たれたエネルギー弾と、轟々と音を上げて空気を裂き突き進む弾裂空が爆煙を巻き上げて衝突した。

耳を劈く爆音は、衝撃波となってあたりに円状に広がっていく。

突風を生み、周辺の草木をなぎ倒す。

「くっ、むちゃくちゃだな!！」

「きゃっ!！」

ものすごい風圧に耐え切れず、まぶたを閉じてしまった二人。

そして、風がやみ砂煙が徐々に晴れていく。

杉弓と篠崎もゆっくりと瞳を開いた。

「どうなった!？」

薄れていく煙の中を目を凝らしながら杉弓が眺める。

晴れた煙の中で俺と化け物は向き合いながら立ち尽くしていた。

「・・・」

もはや立っていることすら限界だった。

そのまま力尽きたように重力に逆らわず、うつ伏せに地面に倒れてしまった。

く、そお・・・動かねえ・・・

「上総！」

「上総君！」

不意に杉弓と篠崎の声が耳に飛び込んできた。

どうやらまだ意識はあるらしい。

「グゴゴオオ!!」

続けて化け物の叫び声が耳に響いた。

負けたのか・・・

その化け物の声にはどこか勝利の喜びが満ちているように聞こえた。

「グゴゴゴオ!・・・グ、ゴオ？」

喚起の叫び声が一瞬止まる。

ブシャアア!!

次の瞬間、化け物の左腕が肩から吹き飛び大量の血があふれ出した。

化け物の血液が地面に伏した俺にモロに降りかかる。

どうだ、化け物・・・俺の勝ちだ・・・ぜ・・・

そして化け物は消し飛んだ左肩を抑えながらジャングルの奥深くに消えていった。

化け物の痛みに堪える叫び声とその足音を最後に俺は意識を手放した。

〜第二十七章〜

体が軽くなりふわふわと浮いているような感覚に見舞われる。

目を開いているのか閉じているのかすら分からなくなる暗闇。

ここは、どこだ？

手で辺りを探るようにあるのかすら分からない空気をかき回す。

俺は・・・どうなった？

あの化け物と戦って・・・それで・・・

少し曖昧な記憶を頑張って呼び起こす。

死んだのかな・・・俺。

五感すら感じない今、自分が生きているのかが分からなかった。

音も痛みも暖かさ、寒さも感じない真っ暗な空間。

ここがああ世ってやつなのか、なんて殺風景なところだ。

ため息を吐いたつもりだったが口から息が出た気がしなかった。

「うわーん」

不意に子供の泣き声が聞こえてくる。

誰か居るのか？

どうやら聴覚が戻ってきたようだ。

そして次第に他の五感も機能し始めた。

徐々に辺りが薄明るくなっていく。

肌を感じる温度が冷たくなり始め、頬に断続的に水があたる。

これは・・・雨？

時間帯は分からないが、太陽光が雲に遮られ雨粒が落ちているのが分かった。

未だに俺はふわふわと浮いたままだ。

「うわーん！おとうさーん！」

不意に視界に小さな男の子が目に入る。

見慣れた風景。

見慣れた駅の改札の前で小さな男の子が父親を呼んで泣いていた。

あれは・・・俺？

目の前で泣きじゃくっていた子供は小さな頃の俺にそっくりだった。

と、言うより明らかに俺だった。

何泣いてるんだよ、みっともないぞ。

人前で大声で泣きじゃくり、行きかう人達の視線を集めている。

雨に紛れた涙が、何粒の地面に零れ落ちていた。

あれ・・・？デジャブだ。

この光景どこかで見たことあるような・・・

確か俺があれくらいの頃・・・って、まさか・・・これって・・・

夢の中か？

あれは間違いなく俺で、しかもこの光景は俺がまだ小さな頃の出来事にそっくりだった。

まだ小さい頃、親父と一緒におもちゃを買いに行くことになり、雨の中傘をさして、駅まで向かっていたときのことだ。

俺が駅前で風船を配っている二足歩行のねずみのキャラクターに気を取られているときに、親父と逸れてしまったんだ。

いくら泣いて叫んでも親父は現れず、結局そのまま親父は行方不明になってしまったのだ。

迷子になったのが俺なのか親父なのか未だに分からないでいる。

その後、いくら時間になっても帰ってこない俺達を心配して、姉と母さんが駅まで探しに来たんだっけ。

そのまま母さんと姉に、びしょびしょのまま泣いて抱きついたんだ。

その日は、一人になるのが怖くて怖くて姉と一緒に寝たんだっけ。

そして、この風景もあの頃と変わらずに母さんと姉が迎えに来て俺は泣きながら抱きついていた。

その光景を上空から見つめている俺。

急に意識が薄れ始めたと思うと今まで濡れることはなかったのに、雨粒が俺の顔に掛かり始めるのが分かった。

頬を伝う雨粒はその風景が完璧に見えなくなっても続いていた。

〜第二十八章〜

「……さく……!!かず……くん!!」

聞き覚えがある声が耳に入ってくる。

なんて言っているのかまでは分からなかったが、最近聞いたことのある声だった。

「……い、しっ……しろ!!……ずさ!!」

もうひとつ聞き覚えのある声が頭に響き渡る。

最初のは女で次は男の声だ。

なんだ……なんて言ってるんだ？

俺を呼んでいるのか？

次第にその声ははっきりと聞こえだす。

「上総くん!!上総くん!!」

「おい、しっかりしろ!!上総!!」

この声、篠崎と杉」。

俺は、生きてるのか？

次第に細く開いていく視界にぼやけるようにして写りだす、二つの顔。

一人は瞳に涙を溢れるほど浮かべて俺の名前を呼んでいる。

篠崎・・・泣いているのか？

そっか、さっきの雨は篠崎の涙か。

瞳が完全に開き、ぼやけていた視界が鮮明になる。

「上総くん！！よかつ・・・」

「泣くなよ篠崎、俺はまだ・・・生きてる」

真っ赤に腫らした瞳に手をそっと添え零れ落ちる涙を優しく拭う。

「よかつた・・・本当によかつたよう・・・」

その手を両手で取って再び泣き出す篠崎。

ああ・・・泣き止ませようとしたのに・・・

全くの逆効果じゃねえか。

「心配させるなよ。このやろっ」

その脇には安堵の表情を浮かべ少し声を震わしていた杉弓がいた。

「らしくねえな、杉弓」

遅しい体と、髭の生えた表情を崩しながら微笑んでいる。

杉弓がうるさいと言い、やっと目覚めた意識を再び飛ばそうとしたのはそのすぐ後だった。

今思うと、親父の行方不明は俺と・・・俺達と同じじゃないのか？

あの時、親父が変なことを言っていた。

『今日は寂しいな』と。

もちろんガキの俺に理解できるはずもなく、おもちゃが欲しいの一心で全く気にも留めずに駅に向かった。

俺は風船を配っていたキャラクターに気を取られホームには入らなかったが、もし親父がそのままホームに言ってあの蒸気機関車に乗っていたとしたら？

考えすぎかもしれない。

でも、いきなり行方をくまますような人間じゃないし母さんだって仲が良かった。

俺達の前で普通にキスだっけする始末。

なのに居なくなつたとしたら、事件に巻き込まれたとしか言いようがない。

警察に言つて捜索もしてくれたが、なんの成果もなし。

俺がこんな目にあつていると考えると親父もあの蒸気機関車に乗つたと考えてしまふ。

そしたら、親父はこの世界に居るのか？

姉も巻き込まれたようだし、親父まで居るとしたら二人とも俺が助け出してやる。

待つてろ！！姉ちゃん！親父！

〜第二十九章〜

二度も飛ばされた意識をなんとかたたき起こし、ここに居ると危険だとのことで体に鞭を打って再び歩き出す。

こちらの世界に来てからかれこれ六時間は経過しようとしていた。

どれだけ歩いててもこの鬱蒼と生い茂るジャングルから抜け出せる気配は微塵もない。

「・・・おい、二人とも大丈夫か？」

先頭を歩いていた杉弓が心配そうに後ろの俺達に声を掛ける。

「ああ・・・さすがに疲れたけどな」

「どれだけ歩けばこのジャングルを抜けられるんですか？」

さすがの俺達にも疲れの表情が顔に浮かび上がってきている。

「たく・・・杉弓の奴、どんだけ体力あるんだよ・・・」

疲労困憊の俺達とは違って、疲れの表情は浮かび上がっているものの足取りはまだしっかりしていた。

「この先、ジャングルを抜けられるかどうかは分からないが、どこか安全な場所に移動しなくては休息も取れない。お前達だって寝てる間にいつの間にか天国に居るってのも嫌だろう？」

その言葉に若干恐怖を覚え、疲れきった体を前に歩かせた。

確かに杉弓の言うとおりだった。

この四方八方を木々に囲まれたジャングルで眠ってしまったらいつ死んでもおかしくはない。

見張りをつけることも出来るが先ほどのような化け物が来たらどうしようもない。

俺達はどこに存在するかも知らない安全な場所を求めてジャングルを突き進んだ。

「……しっ！」

荒い呼吸と地面を草木を踏みしめて歩く音を杉弓の声が止めさせる。

後方に居る俺達に水平に手を翳して足取りを止めさせた。

「……どうした？敵か？」

かすれ声のような小さな音量で杉弓に問いかける。

「いや……違う」

「ならなんだ？」

再び化け物が現れたのかと思いき緊張が走るがどつやら違うようだ。

「聞こえないか？」

「……なにがです？」

緊張が解けた篠崎も武器から手を放していた。

「……水だ、水が流れる音がする。近くに川があるぞ」

その言葉を聞いて耳を澄ましてみると、さらさらと水流の音がかすかに聞こえてきた。

「確かに聞こえる」

こちらの世界に来てから食べ物はおろか水分すら取っていない俺達の心にかすかな希望が満ちた。

杉弓が耳の裏に手を当ててその水流の音を探る。

「あつちだ！行ってみよう」

方角が分かったのか杉弓の足取りに続き俺達も歩を進めた。

「……川だ」

「まじかよ」

「・・・」

俺達、三人は言葉を失った。

水流の音を探りその方角に進むと透明に澄み切った清らかな清流の音が目の前で流れ奏でていた。

警戒を怠らず、俺達はその川に近づき杉弓が水を一口すくって啜る。

「うん！飲めるぞ！」

喜びに満ちたその表情は疲れが一瞬にして吹き飛んでしまったかのようにだ。

「やった！ついてるぜ俺達！」

「本当によかったあ！」

それにつられ俺と篠崎も清流の水をすくって一気に啜った。

胃に入り込んでくる水は、体の疲れも心の疲れも一瞬で吹き飛ばしてしまっくらいおいしかった。

俺達は無我夢中でその水を飲む。

もはや敵の目など一切気にしていないかのように。

この川にたどり着いた頃には空も薄明るくなり、微かの陽光が差し込んで川に反射していた。

〜第三十章〜

「生き返ったぜ〜」

川の畔に無防備に座り込んでそう言葉を発する。

「確かに、これは助かったな」

杉弓は水浴びをしたのか髪の毛が濡れて雫を垂らしていた。

「ここでしばらく休みましょう」

どこで取ったのか知らない竹筒を水筒のようにして俺達に渡してくれた篠崎。

本当にしっかりしてるぜ。

まるで母さんを見ているかのような感じがした。

ふと対面の川岸に目をやる。

「・・・ん？」

視界の中になにかうごめくものを捕らえた。

そちらに目を移すと俺達に場所から右方に少し進んだところに、人影のようなものがあつた。

「おい、二人とも・・・あそこ・・・」

声を細くして、その人影に気づかれぬように杉弓と篠崎に声を掛け指差す。

「人・・・か？」

「ですかね、一緒に列車に乗った人達でしょうか？」

その声に反応して二人は静かに俺の場所まで移動してきた。

目が慣れてきて次第にその人影が鮮明になっていく。

どうやら、少年のようだ。

衣服を着ているのだがかなりさびれていて汚れが目立つ。

少年は、ゆっくりと川の畔に現れると警戒しているのか辺りを見回している。

こちらには気づいていないようだ。

不意に少年がやってきた方向の草陰に姿を消す。

「あ・・・戻った」

「戻りましたね」

「戻ったな」

三人の言葉が重なり、少し大きくなった声量を口に手のひらを当てて慌てて抑えた。

そして再び少年が草陰から頭だけを出して、辺りを見渡す。

「・・・可愛い」

そのしぐさに篠崎の口から本音が零れだした。

少年頭を引っ込めると、後ろ向きで再び表したその姿に俺達は目を疑った。

「なんだ・・・あいつ!？」

俺達は揃って目を大きくする。

少年の臀部からは犬のような尻尾が生え、頭部にも同じような耳、そして引きずるようにして一人の女性を運んでいた。

その女性にも少年と同じく尻尾と耳が生えていた。

「あいつら、この世界のやつらか」

そういつ杉』。

俺も同感だった。

少なくとも俺達の世界にあのような姿をした人間はいない。

明らかにこの世界のものだろう。

「あの女の人・・・凄い怪我してる」

篠崎の言葉に反応して女性に目をやるとその体中は傷だらけで出血がひどかった。

少年がやっとの思いで川辺に到着する。

上着のポケットから一枚の汚れたタオルを取り出して水に浸し、力強く絞ると川辺に倒れこんでいる女性に近寄っていった。

どうやら看病しているようだ。

その姿を見つからないように息を潜めながら俺達は眺めていた。

〜第三十一章〜

不意に少年が現れたところの草陰が揺らめく。

「今度は何だ？」

一瞬、後方に視線を移した少年だったが特に警戒することもなく再び看病を始めた。

後方の草陰から何者かの姿が現れる。

「なっ!？」

すこし声を荒げてしまって大きく開いた口を杉弓がふさいでくれた。

危うく気づかれるところだった。

後方から現れたのはなんと先ほどの羽を生やした狼の化け物だ。

数は二体。

「話せ杉弓!あの子が襲われる!」

狼はゆっくりと少年と女性の下へ足を進めていた。

俺は杉弓の抑えていた腕を振り解く。

そして、弾丸のように飛び出し一気に対岸へと向かった。

「待て上総！！・・・んの馬鹿野郎が」

それに続いて杉弓と篠崎も飛び出していった。

「危ねえぞ！！少年！！」

「え！？」

飛び掛って大声を上げながら近づいていく俺に気づいたのか、こちらに顔を移す。

狼も俺達に気づいたのかその足取りの方向を少年から俺に向けなおし駆け出す。

「ガウツ！」

「はあああつ！」

拳を振りかざし狼に向かっていく。

その時、間合いを見切られたかのように狼が背中を向ける。

次に瞬間、後ろ足で思いつきり川辺の砂利を蹴り上げ俺に飛ばしてきた。

「うお！？」

それに反応して両腕を体の前で交差させて防御する。

間合いを完全に詰めきれず少し離れた場所に着地した。

くそ・・・犬の癖になかなかやるな。

片手を地面につき、砂利を握り締めた再び駆け出そうとした次の瞬間！！

「やめろおおおっ！！」

少年がマイクでも使ったかのような大声を発した。

「いい！？」

その想像を絶する大声にたちまち耳をふさぐ。

杉弓と篠崎も俺のはるか後方に居るのにも関わらず耳をふさいだ。

狼達も一瞬体を強張らせて怯むと、そそくさと足を少年の方へ向けていった。

「はぁ！・・・はぁ！・・・はぁ！・・・はぁ！・・・」

肩で息をする少年。

驚いたことにその足元で狼達が垂れ下がった手を舌で舐めていた。

まるで懐いてるかのようだ。

完全に呆気をとられた俺はしばらくその場から動けなかった。

〜第三十二章〜

「お前達！ニンゲンか！？」

少年が息を整えると先ほどよりも数段小さな声で声を上げた。

かなり大きな声だが・・・

「あ、ああ・・・」

そんな簡単な返事しか出来ない俺。

「今度は何しに来た！？さっきのお返しか！？」

牙を剥き、犬のような唸り声を上げる。

狼達もそれにつられ、両側で少年を中心に円運動をしながらつなり声を上げる。

「ま、待て・・・話が読めない、さっきのお返して何のことだ？」

すこし心当たりはあったがここは、そう言ってみる。

「嘘をつくな！！さっきいきなり現れて姉上を襲おうとしたじゃないか！！そいつらを追い返して怪我させたお返しに来たんだろ！？」

姉上？そうかその女性はこいつの姉か・・・

そんなことより、この少年が主張することには心当たりがなかった。

「なんのことだ？俺達は本当に知らない!!」

頭に血が上っているのか今にも吠え出して襲ってきそうな狼。

「嘘をつくなっ!!・・・ぐっ!!」

声を荒げたと思うと少年は肩を抑えていきなりその場に片膝を着いた。

狼達がそれに気づき少年に近寄って顔を舐める。

「お、おい！大丈夫か!？」

倒れた少年を見て立ち上がる。

「く、来るなあ・・・」

良く見ると少年も肩に大きな傷を負っていた。

「お前・・・怪我してるじゃねえか」

「うるさ、い・・・誰にやられたと思ってる!？お前達ニンゲンだぞ!？・・・この・・・呼禍者こかしやが・・・」

呼禍者こかしや？

何のことだか知らなかったがそんなことよりも少年の傷を手当てしなくては!

俺は両手の武器を外し、地面に置いた。

「その人間達がお前達に何をしたかは本当に知らないが、少なくとも俺は何もしない」

威圧を完璧に消したやわらかい声で話しかける。

ゆっくりと少年のもとへ足を進める。

「く、るな・・・」

「大丈夫だ・・・」

片目を閉じて、地面に倒れこむ少年。

「ウウウ・・・ガウ!!」

不意に一匹の狼が飛び掛ってきた。

ここで抵抗しちゃだめだ・・・

グシャア!

「上総!!」

「上総くん!!」

杉弓と篠崎の声が重なって聞こえてきた。

狼の牙が俺の右肩を捕らえ食いちぎらんばかりで食いついてきた。

右肩を伝って手首の服の下から血液が地面へと垂れる。

「信じる……」

それでも歩は止めず少年の下へ向かいたどり着く。

「グ、グウ……」

本当に何もしないとやっと伝わったのか狼が突き刺さった牙を抜き、出血した部分を舐めてくれた。

「……お前達」

そんな狼を見て少年は驚いたように両目を開く。

「お前……不思議な奴だな、他のニンゲンとは違う臭いがする」

少年も信用したのか小さな声でつぶやいた。

「俺はなんてたって俺だからな……」

近づいてきた狼の頭を優しく撫で、応急処置を始めた。

〜第三十三章〜

「まったく・・・本当に無茶しやがる」

ごめんなさい。

「本当ですよ！？もしこんな怪我ですまなかつたらどうするつもり
だっただんですか！？」

ごめんなさい。

「お前といたら命がいくつあっても足りないな」

ごめんなさい・・・

「こんどからは自覚ある行動を取ってください」

「ごめんなさいいいい！！！」

あれから狼の少年と女性の応急処置を終え、自分の肩の怪我を治療
しているところだ。

さすがに肩は自分で出来ないため杉弓と篠崎に処置を頼んだのだが・
・

「泣いて誤るくらいなら最初からあんな無茶な行動はしないでくだ
さう……」

そう言っつて篠崎が包帯を結びながら傷口を叩く。

「ひいひい!?!」

泣いてるのは篠崎のせいだよぅぅ……

でも確かに篠崎たちの言うとおりでっつた。

あのまま何もしないで見ていれば俺は怪我する心配もなかったのだから。

「ははは!お前たち面白いな」

「ガァウ!」

狼の少年と狼が笑う。

俺達もそれにつられ笑った。

まあ俺のは引き笑いだったが。

そついや……こつちに来て始めて笑ったな。

つか最近ぜんぜん笑ってなかった。

女性の側で俺とは反対の左肩に包帯を巻いた少年が寄り添っている。

「そついえば……あなた達は何者なのですか?」

篠崎が俺に包帯を巻きながら声を上げる。

俺はもって別の・・・そう、悲鳴にも似た、というかそっくりな声を上げる。

「そついや紹介がまだだったな！俺達はウインガム族。この放流世界シャツトダウンに住む獣族だだ」

そついつてすでに元気を取り戻したかのように立ち上がって言う。

さつきまであんなに死にそうだったのに・・・

「んで、俺はそのウインガム族のフリント。んでこいつらは俺の友達のダッシュとロードだ！」

「ガウ」

「ウオン」

少年はフリントと名乗り、それについて二匹の狼が声を上げた。

ど、どっちがどっちだかわからねえ・・・

「えと・・・フリント？どっちがダッシュでどっちがロード？」

俺の気持ちを篠崎が完璧なまでに代弁してくれた。

篠崎はテレパシーも使えたのか！？

そついつとフリントが片方の狼を持ち上げて腹部を見せる。

「ここの腹の黒い毛が真ん中に集まってるのがダッシュ」

「ガウ」

そっいつて降ろし、もう片方を持ち上げ

「んで散らばってるのがロード」

「ウオン」

と、説明してくれた。

「まあおいらはそれを見なくても分かるけどね！」

とってダッシュとロードの頭を撫でた。

とても気持ちよさそうにしているのが俺には分かった。

第三十四章

「そついえば・・・」

篠崎が言いにくそうに重たい口を開いた。

「ここに来る途中、あなた達ウィンガム族といざこざがあつて・・・」

申し訳なさそうに篠崎が俯いたまま言う。

「いいよ、外の奴らはみんな悪い奴らばかりだから、俺達は自分からは絶対に他の生き物を襲わないから・・・」

すは言ってるもののやはり同胞を失ったのは辛いのだろう。

声がかくぐもっていた。

「おーい、水汲んできたぞ」

静寂が流れていた場にタイニング良く？杉弓が帰ってきた。

「ん？どうした？篠崎？」

辛そうな表情に気づいたのか杉弓が心配そうに声を掛ける。

「ん、大丈夫です。それより紹介します。この子がフロントで、この二匹がダッシュとロードです！」

平常心を保ったように振る舞い杉弓に一人と二匹を紹介する。

もちろん、ダッシュとロードの説明が必要だった。

水で濡らしたタオルを女性の額に掛ける杉弓。

見とれているのかどうかは分からないがその脇でじっと座っていた。

フロントも信用してくれたのか女性の側に行ってもなんも警戒することはなくなった。

「さてと、あの馬鹿はほつといて・・・」

体をゆっくりと起こしてフロントに正対する。

「俺も一つ聞いていいか？」

「ん〜？何でもいいぜ〜？」

フロントがにっこりと微笑んで答える。

「率直に聞く。ウインガルフ族はみな俺達人間と同じ姿をしているのか？それともダッシュたちと同じで言葉は喋らず四足歩行か？」

「う・・・そ、それは・・・」

フロントはどもってしまった。

「ちょ！上総くん！その言い方はちょっと・・・」

「黙っててくれ」

すこし威圧をこめてその言葉を静止させる。

フロントは俯いたままだ。

「お、俺達は・・・」

ゆっくりと口を開く。

「あっ！？ちよっと、まだ動いてはならんぞ!?!」

不意に後方から女性を眺めていた杉弓の声が響いてきた。

「フロント・・・それ以上は言うてはならぬ」

「姉上!!」

ゆっくりと上半身だけ起こして女性は目を覚ました。

その姿を確認するとフロントは飛び上がりながら女性の下へ飛びついて抱きついた。

上半身だけ起こした女性はとても美しかった。

獣のようなワイルドさの中にどこか気品にも満ちたその姿からは目が離せなかった。

容姿は文句の付け所などあるはずもなく細く整った輪郭。

肩ぐらいまでの長さで茶色をして少々、乱れた髪。

きりつと鋭い瞳と眉毛。

戦いをしていたのかすこし汚れや乱れが目立ち、肌が露になっている。

これなら杉弓が目を離せないのも納得だ。

〜第三十五章〜

「姉上……でもこいつら普通のニンゲンとは違って乱暴じゃないんだ」

胸元に抱きついたフロントが上目遣いで女性に言う。

「それは分かっている、我らに恐れただけでなくこつまで手当てをしてくれたのだからな」

そついつて礼を言う一つ頭を下げる。

それに答えるようにして俺達も頭を下げた。

美しい女性はマナーもしっかりとしていた。

「それにこのものたちからは奴らとは違う臭いがするからな」

そついつてフロントを抱えたままゆっくりと立ち上がり俺達の前まで歩いてくるとそこに腰を掛けた。

フロントは未だに抱きついている……甘えすぎだろ。

「本当に世話になった。私はウインガルド族の“シーナ”だ」

「！？シ、シーナ！？」

耳を疑った。

きつと書き方は違えど発音が全く同じ、いつもの聞きなれた言葉だったから。

「どうしたのだ？」

「い、いや・・・なんでもない、ちょっと知り合いに同じ名前の奴が居てな・・・」

あせりは何とかごまかせただろうか？

不安と心配が胸いっぱい広がった。

「俺は伊織だ。上総伊織」

なんとか心配を振り払うことが出来た。

「イオリダカズサイオリ？なんて長い名前なんだ・・・」

そういうと、頭に疑問符を浮かべながら左手を出してきた。

「ああ、よろし・・・って違うわ！」

あぶな・・・危つく流れに飲まれてそのまま俺の名前がなんかヒンドウー的な名前になるところだった。

「伊織だ！伊織！い・お・り！」

「ん？イオリダイオリイオリ？さっきと変わったな？少々言いにくいぞ・・・まあ、よろしくな」

再び分かったつもりなのか手を翳す。

こ、こいつ・・・めちゃくちゃ綺麗な顔して、天然属性かよっ！お決まりだな・・・

などと分けの分からないことを考えてしまったが何とか振りほどいて、説明しなおす。

「俺は！ 伊織 って名前だ」

「そうか イオリ だな！よろしく」

本当に分かったのかは知らないがなんとか握手を済ます。

その後の杉弓と篠崎の自己紹介にも手間取ったのは言うまでもない。

〜第三十六章〜

不意にフリントの姉で、ウインガム族の女性のシーナが立ち上がる。

抱きついて離れようとしなかったフリントを引き剥がすようにして

・・・やっぱり、姉ちゃんと同じ名前だとなんか変な感じがするな。

心の中の変なもやもやが解けないでいた。

「この匂い・・・懐かしいな・・・」

と、シーナの声が耳元で聞こえた。

耳元？

「・・・あ、あの!？」

声が裏返ってしまった。

無理もない。シーナが立ち上がったと思うとおもむろに俺の側まで近寄ってきて、目の前数センチのところまで止まり、その整った鼻で俺の匂い?を嗅いでいたのだから。

「シ、シーナさん!？何してるんですか!？」

「・・・ああ・・・」

篠崎も声を裏返して慌てるようにし、杉弓は何故か肩をがっくりと落としていた。

とろけてしまうような甘い声と、少し潤いを帯びた唇、安心しきったようなその表情に俺は完璧に目を奪われた。

心臓の鼓動がはちきれんばかりに脈を打つのが聞こえる。

こんなに激しかったらシーナに聞こえてしまうんじゃないかというくらいうるさい。

緊張が一向に解けず俺は生唾を飲み込んだ。

「ああ、すまない。つい懐かしくてな……」

すう、っと俺からゆっくりと離れていく。

今思うとこんな綺麗な人にこれだけ近くに寄られたことはなかったため離れてからもうちよつと堪能したかったなと後悔した。

冷静さを取り戻した俺はシーナの甘い声から零れた言葉に疑問を抱く。

「懐かしい？どいうことだ？」

「……いえないんだ」

天使のような微笑が一瞬、凍りついたかのように寂しさに満ちた。

零れた言葉も感情が込められていないような音に変わる。

「そ、それより・・・お前達。疲れているであろう。我らウィンガ
ルム族の長に合ってはくれないだろうか？久しぶりの客人だ、もて
なそう」

「・・・まじ？」

俺達三人は思いもよらないその言葉にお互い顔を見合わせる。

「ああ。おおまじだとも」

「「「やったー!!!」」」

俺達三人の喚起の声が重なってあたりに盛大に響き渡った。

〔第三十六章〕（後書き）

「近況報告」

まことに申し訳ないのですが・・・

この度、私 Verfaia は今流行のインフルエンザに感染してしまつたため執筆が非常におくれてしまつています・・・

数少ない購読者の皆様、大変ご迷惑をおかけいたしますがご理解とご容赦をお願いいたします。>< ; ; ;

〜第三十七章〜

あたりをほんの僅かな陽光が木々を照らし出し始めた。

空を見上げても鬱蒼と生い茂るジャングルで直接、太陽を視覚に捉えることは叶わなかった。

そこに広がるのはただ寡黙に立ち尽くす異形な木々だけだ。

こっちの世界に来てからまともに太陽の光を見ていない。

今、俺達はシーナとフリントに連れられてウインガルム族の集落を目指しているところだ。

周囲の警戒なのかダツシユとロードが先頭を切って進んでいる。

その後をフリントが続き篠崎、杉弓、俺、シーナの順番でジャングルをひた歩いていた。

「こっちの世界に来てから太陽を全然見てないよ」

ピクニック気分でこのジャングルを散策など出切る筈もない俺達は、歩き出してからほとんど一言も喋ってはいなかった。

俺はどうもそれが耐えられず思わず口を開いた。

「……そういえばイオリ達はこの世界をどこまで知っているのだ？」

俺の言葉に答えるような言葉ではなかったが、後ろから声が聞こえてきた。

「うーん、そう言われると全くって言うていいほど分からないな」

声の招待はシーナ、俺はその言葉に答えることにした。

「そうか・・・シャットダウン・トレインは知っているか？」

「シャットダウン・・・ああ、俺達が乗ってきたあの化け物みたいな電車のことか」

一瞬何のことが分からなかったがどこか聞き覚えのある単語とトレインという言葉からすぐにあの電車だということが分かった。

「あの電車が現実世界に現れて、その世界の住人をまとめて何人か連れてくる・・・これはこの世界の危機を示しているんだ・・・」

「危機？」

足取りをとめずにシーナの言葉に耳を傾ける。

「ああ、今から・・・ちょうど十年くらい前か・・・シャットダウン・トレインが現実世界に現れた、その時は幻獣王ヨルムンガンドの反乱が起きたんだ」

「幻獣王・・・」

それに・・・十年前、ちょうど俺の親父が行方不明になった年じゃ

ねえか・・・

信じたくはない憶測が胸いっぱい広がる。

「それでシャットダウン・トレインで連れてきた一人の人間の男が
幻獣王を倒してこの世界を救ったんだ」

「・・・」

嫌な憶測がどんどん胸に押し寄せてくるのが分かる。

やめろ、信じたくはない。

「だが、この世界を救っているニンゲンたちは決まってこの世界が
危機に瀕したときに現れる・・・いつしかニンゲンは災い呼び寄
せる者と、呼禍者こがしやと呼ばれるようになってしまったんだ」

「災い呼び寄せる者が・・・」

強ち間違いでもないだろう。

俺達人間は事あるごとにやれ戦争などと躍起になって他国を潰そ
うとしていた時代があった。

こっちの世界の者からしたら、人間がやってきたところでそいつが
世界を救っても人間がこの危機を呼んだとしか考えないだろう。

「でもきつと今回も、お前達の誰かがこの世界を救ってくれるんだ」

シーナの表情が柔らかくなる。

俯くようなしぐさで微笑んだ。

や、やべ・・・この人可愛すぎだろ!!

ああ、俺の理性がああ・・・

崩れてくうう・・・

なんとか突貫工事だが理性の崩壊を防ぐ。

「どうしてシーナはそこまで俺達人間をよく言ってくれるんだ？」

フロントにはあそこまでぼろ糞に言われたのに・・・

「う、すまない・・・それも言えないんだ」

俺の声に反応して首を上げるも、言えないことだったのか再び顔を俯かせてしまった。

「ワウ！」

不意に前方にいたダッシュユが吠えた。

「姉上！集落が見えたよ!!」

それに続いてフロントの声が上がると篠崎と杉弓が喜びを露にして駆けていくダッシュユ達に続いて行く。

「少なくとも私の目にはイオリ達が災いを呼ぶような者達には見え

ぬよ
「

そういつて微笑みながら短い髪をなびかせながら集落へと走っていた。
った。

さきほど工事した理性のビル群が爆破されたように豪快に崩れ去っていった。

〈第三十七章〉（後書き）

「近況報告」

この度インフルエンザに感染していた私ですが病状の回復が見えてきたので執筆を再開したいと思います。

数少ない購読者の方々お待たせしたことを大変心からお詫びいたします。

それでは「シャットダウン」をお楽しみください^^w

第三十八章

「おお、すげえ・・・」

先に駆けて行ってしまったフリントとシーナの後を追って集落がある場所まで向かっていった。

少し進んだその場所には洞窟がありその中に入ると所々に火の灯されたたいまつが燃え上がり辺りを明るく照らし出していた。

動物がどうやって火を炊くんだ？と、一瞬考えたが先ほど杉弓の話で

「俺の相手した奴は火を吐いてきた」

と言うことを聞いたため中にはそういう特別な能力を持った狼がいるのだろう。

お世辞にも広いとはいえない内部だが別に暮らせないというわけでもなく俺が想像していたより存外綺麗なところであった。

辺りを見回せば翼を生やした狼、ウィンガム族が点々と見られる。

警戒しているようにも見えるが今すぐ襲い掛かってくるようなことはなさそうだ。

篠崎と杉弓もこの洞窟内の集落に驚きを隠せないでいた。

ふと、隣にいたシーナが歩き出す。

何をするのかと試ってみていると、前方にいたウインガム族に人間の言語で話しかける。

通じるのか？そもそも何でシーナやフリントは人間の言葉が話せるんだ？

二人は他のウインガム族と違って耳と尻尾が生えている以外、至極人間に近い外見をしている。

しかし、ダッシュやロードのようにほとんどが狼の外見をしているものたちしかこの場所にはいない。

ふと辺りを見回すといつの間にかダッシュとロードはいなくなっていた。

話を終えたのかシーナがこちらに戻ってくる。

「長老と話をすることが出来る。他の者達にもイオリ達は害がないということも伝えた。寝床も用意させるよう手配したぞ」

「何から何まですみませんシーナさん」

「俺達みたいな部外者でもいいのか？」

篠崎と杉弓も集まる。

「気にはするな。お前達は特別だ」

そういつてシーナは再び笑顔を零す。

この笑顔を見ているだけで俺は今までの疲れが癒えてしまうような気がした。

「ち、長老って?」

なんとか自分の心を誤魔化してシーナに尋ねる。

「まあ、この集落の長みたいなものだ」

そういつてこつちだと俺達を案内して奥の暗がりには足を進めた。

少し進むと大部屋のような場所に出た。

中央に岩が重なり少し高くなった場所に草木のカーテンのようなもので遮られたところがある。

シーナがその前に片膝を着いた。

「長老、シーナ今戻りました」

がさつと奥で何か動く音が聞こえる。

「すみません、偵察の途中でニンゲンに襲われ負傷していたところをこの者たちに助けられました」

俺達も前に進んでしゃがんでいるシーナの後ろに立ち尽くす。

「・・・この匂い、ニンゲンか」

な！？

少し空気が震えているような気がした。

この草木のカーテンの奥にいる者の殺気なのか、密閉されたこの空間で空気が俺達を押しつぶそうとしているようだった。

奥から擦れたようないかにも長く生きていそうな低い声が響いてきた。

しかもその声は俺達人間の言葉だった。

「長老！！こ、この者たちは他の人間とは違います！！」

シーナが慌てるように声を荒げる。

次の瞬間、草木のカーテンが音もなく開いた。

〈第三十九章〉

「な!？」

生唾がのどを通り抜ける。

まじかよ・・・

言葉を失った。

どんな言葉を選んで発すればいいのかわからなかった。

カーテンの奥から姿を現したのは、三本の尾を持つ老いた大狼だった。

伏せるようにして岩場に座っているのだがその全身から放たれる殺気はまるで俺達の心臓を直に握っているようだった。

今にも握りつぶされてしまいそうな威圧に俺も篠崎も杉弓も体の震えを抑えることが出来なかった。

「ち、長老!！」

再びシーナが声を荒げる。

今度は立ち上がった。

「・・・ふ、何、大丈夫じゃ。別にとって食ったりはせん。」

その言葉と同時に張り詰めていた空気の糸が途切れた。

それと同時に今まで聞こえなかった心臓の鼓動が自分にも聞こえるようになってきた。

よ、かった・・・俺、まだ生きてる。

この大狼を目にした途端、殺されると思っていた自分がいた。

「それに、この者たちからは災いの匂いはせんからの・・・」

「無論です。私の目に狂いはないです」

そういつて立ち上がり身構えていたシーナも落ち着きを取り戻していた。

しわがれた声とやせ細った体、それに今にも折れてしまいそうな翼のこの大狼が長老なのかと一瞬思ったが先ほどの殺気がその考えを一瞬にして否定した。

「すまぬな客人、ニンゲンと対峙するとつい威圧してしまうのじゃ」

「い、いえ・・・大丈夫です」

先ほどの殺気とは似ても似つかないほどの優しい声と表情に俺の心に安堵が流れる。

「シーナから聞いているやも知れぬがワシはこのウィンガルの集落をまとめる長、グリムハウンドじゃ」

「俺は上総・・・伊織です」

一瞬、さっきのシーナの件で自己紹介に戸惑ったがグリムハウンドはすぐに理解してくれた。

「私は篠崎未来です」

「俺は杉弓吾朗座と言います」

それをきっかけに篠崎と杉弓も簡単に自己紹介を済ませた。

「うちのフロントとシーナが迷惑をかけたな」

「いえいえ、気にしないでください。怪我しているものを助けるのは当たり前ですから」

この言葉に嘘偽りはなかった。本音を言ったまでだった。

「・・・ふおふおふお。そなたはやはりニンゲンらしくないのう!」

しわがれ声で大きく笑った後、若干咽っていた。

きつと長い年月生き続けてきたのだろう。

その後にシーナがすぐにグリムハウンドの容態を気にしていた。

「ゴホッ、ゴホッ・・・すまぬな客人。今日は疲れたであろう。寝床は用意させた。シーナ案内してやりなさい」

「はい。イオリ。こっちだ」

シーナが一礼した後に篠崎と杉弓を連れて行く。

確かに今日はへとへとだった。

いっぺんにいろんなことが起きたからな・・・

疲れたの一言じゃ片付けられないくらい本当にいろんなことがあった。

「イオリ・・・」

シーナに付いて行く篠崎達の後を追おうとすると再び後ろから声をかけられた。

振り返ると、

「時間があつたらゆっくりと話そう。そなた達の力になれるとおも
うぞ」

「ありがとうございます！」

深く一礼して俺はこの場を立ち去った。

「全く……親子といふものは「ついでして似るものなのだ、
レ
ンジよ……」

〜第四十章〜

薄暗い洞窟をシーナの後ろに続いて歩く。

正直なところ、早く横になりたかった。

こっちの世界に来てから始終歩き詰め。

それをこの暗く長い洞窟を歩くのは体にかなり堪えた。

それは篠崎や杉弓もおなじだった。

前に進める一歩がどんどん弱弱しくなっていくのが後ろから見ても明らかでその背中からは言い表せられないような疲労の表情が見て取れる。

「すまぬな・・・この洞窟は長くて」

そんな気持ちも見透かされていたのかシーナが心配そうに声をかけた。

「はい、でも大丈夫です」

その言葉に篠崎が答える。

俺と杉弓は黙ってなんとか足取りを進めていた。

「着いたぞ。今日はココで休養してくれ」

そういつてシーナの指差した部屋は、覚悟はしていたがやはり俺達人間がいつも眠っているような環境とは程遠かった。

草が敷き詰められた地面の上に他の生き物の毛皮であろう巨大な寝床。

枕などあるはずもなく三人して雑魚寝の状態だった。

「……助かるよ」

篠崎と杉弓はもう立っていることすら叶わない様子で躊躇はしたもののその毛皮に一気に倒れこんだ。

それを見て俺とシーナが笑いを零す。

「ははは、よほど疲れていたのだろうな」

「無理もないよ、こっちに来て歩き詰めだ」

たちまち意識を飛ばしてしまった二人。

篠崎も女だというのに全く戸惑わないのは疲れせいか。

「シーナ、助かったよ。これでなんとか休むことが出来る」

「そ……うか、それは……よかつ……」

俺がシーナにお礼を言いながら振り返ろうとしたときだった。

俺の目に映ったのはこちらに向かって力なく倒れこんでくるシーナの姿だった。

「シーナ!？」

もたれかかった体を支える。

力が入らないのか全体重をシーナは俺にゆだねていた。

肩の後ろに回った口から荒いと息が聞こえてくる。

「あ、あれ?どうしたんだ・・・力が・・・」

微かに感じる体温には熱気を帯びていた。

シーナの胸から伝わる柔らかさと心臓の鼓動が俺の体の中に入ってくる。

「とりあえず、シーナの部屋まで行こう」

そういつて俺はシーナを背中側に回してひょいっと背負った。

なんだ軽いんだな。

「イ、イオリ!?!何をする!?!」

先ほどの弱弱しい声とは裏腹に甲高い声が響いた。

「何って・・・連れてくだけだよ。歩けないだろう？」

「そんな・・・イオリだって疲れいるのに・・・」

「気にすんな、これくらいは平気だ」

と、多少見栄を張ってみる。

シーナは顔を夕焼けよりも真っ赤に染め上げていた。

きつとこのウインガム族の集落にいるから異性への免疫がないんだろう。

なんたっているのはフリントか狼たちだけだから・・・

そしてシーナの案内のもとシーナの部屋に向うと、そこにはフリントがいてシーナのことを任せるといい、俺は先ほどの俺達の寝床へ向かう。

もうすでに限界を突破していたのかどの道を通ってきたのか分からず、俺が歩いているのかさえ分からなかった。

そんな中、なんとか部屋について篠崎と杉弓の寝ている間の寝床に力なく体を落とした。

〜第四十一章〜

ダダダダダ・・・

・・・ん、なんだ？

ダダダダダ・・・

何だこの音は・・・

人が寝てるってのに騒がしいな。

寝てる？

そうか、俺あのまますぐに気を失ったんだっけ。

今何時なんだ？

だいたいこの世界に時間はあるのか？

まだ完全には目覚めていない意識を地面を駆ける様な騒がしい音に意識を奪われる。

次第に重く閉じた瞳が開かれる。

あれ？篠崎と杉弓は？

寝ぼけ眼で横を見るが薄れた視界に寝ているはずの二人の姿が捉え

られなかった。

ダダダダダ・・・

ん、くそ・・・なんだってんだよ

まだはつきりと開いていない瞳を擦って起こし、重たい体を持ち上げた。

大きなあくびが口から無意識に突いて出る。

足取りを出口のほうへと向けて歩き出した。

岩の壁から顔をひよいと出すとたくさんのウイングガルド族が駆けているのが目の飛び込んできた。

「な、なんだあ？何があつたんだ？」

その光景に呆気にとられて開いた口がふさがらない。

「あ！上総君！！！」

「篠崎！！！」

ふと視界の脇から飛び込んで来た篠崎に声を掛けられた。

「一体何があつたんだ？」

「大変なの！！シーナさんが、シーナさんが！！！」

篠崎は慌てるようにして俺の手を取る。

シーナがなんだって？

少々混乱しているのか篠崎の不十分な説明に俺は状況がうまく理解できなかった。

「シーナがどうしたんだ!？」

「えーっと・・・とにかく来て!！」

「うお!？」

握られた手をそのまま篠崎に引きずられて俺はシーナの部屋の方へ連れられていった。

つか・・・篠崎はシーナの部屋覚えてるのかな・・・

「フロント君!！」

「篠崎のねえちゃん!」

シーナの部屋に駆け込んだ俺達に掛けられた言葉はフロントの声だった。

シーナの部屋には杉弓のほかたくさんウィングガム族がいて、シーナの横になっっている周りを取り囲んでいた。

「何があつたんだ！？フリント！！」

その異様な光景にただ事ではないと感じフリントのもとへ駆け寄る。

「姉上が！！姉上が！！」

フリントは誰が見ても分かるほど混乱していた。

顔は俺の方を見ているのだが視線が全く安定しておらずきよきよると浮遊していた。

「落ちて着けフリント！いつたいシーナに何があつた！？」

目の前に寝ているシーナに一瞬視線を移してフリントの両肩を掴み視線を安定させる。

「えと・・・今朝起きたら姉上が寝てただけど、なかなか目を覚まさないから起こそうとしたら凄い熱で・・・それに・・・」

熱！？昨日の傷口からばい菌でも入って感染したか！？

「体中に見たこともない痣が！」

「痣！？」

フリントの言葉でシーナの額を触ると確かに異常なほどの熱を帯びていた。

微熱なんてレベルじゃねえぞこりゃ・・・

その後、腕をまくってみると痛々しい光景が目飛び込んできた。

〜第四十二章〜

「な、なんだこれは・・・？」

俺の目に飛び込んできたのは両目を塞ぎたくなるような光景だった。手首から二の腕に掛けて斑に広がる紫色をした毒々しい痣。

そしてそれは、脈を打つかのように膨れ上がりながら鼓動をしていた。

「うっ・・・」

その光景を目にした篠崎は口を両手で覆い、目を反らした。

「上総・・・こんな痣見たことあるか？」

横で一緒にシーナの容態を伺っていた杉弓の声が聞こえてくる。

「いや・・・」

もちろん見たことがあるはずもない。

何しろこの痣一つ一つがまるで生きているように鼓動しているからだ。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

その鼓動が打ち付ける度にシーナは荒いと息を零して苦しそうに眠っていた。

額には多量の汗が流れ出し、纏っている毛皮の衣服はすでにびしょ濡れだ。

「なあイオリ！これはなんなんだよ！？」

「分からん。俺達の世界でこんなものは見たことがない・・・」

「じゃどうなるんだ・・・まさか、姉上・・・」

「それ以上言うな」

言っではならないようなことをフロントが口走ると思ったので俺はその口を左手で塞いだ。

「とにかく、なんでもいい。布でも毛皮でもいいから濡らして体中の汗をふき取ってやれ！それと誰か氷を作れるものはいないか！？そいつに氷を持ってこさせ、額を冷やしてやれ！俺は長老に会ってくる！」

「わ、わかった！」

そういうとフロントは一目散に部屋を駆け出していった。

とりあえず長老に話を伺ってみよう！なにか・・・何か知っているかも！！

俺は部屋を駆け出した。

「上総君！私も行く！」

「俺もだ！」

後ろから篠崎と杉弓の声が聞こえてきて俺達三人はこの部屋を出て長老のいる奥の部屋へと掛けていった。

「長老！」

長老の部屋に駆け込んでいき声を荒げる。

「長老！いらっしやいますか!？」

「イオリか・・・おるぞ」

草のカーテンの奥から声が聞こえてきてそれがゆっくりと開く。

「あの・・・ハア・・・シーナが・・・」

やば・・・全力で走ってきたせいか、息が・・・

肩を大きく揺らして両膝に手を突きながら何とか声を振り絞って出そうとする。

「分かっておる。熱と痣のことであるっ」

しわがれた声が俺の気持ちを察して先につぶやいた。

「熱はおそらく細菌からの感染による発熱じゃ。あの痣も感染によるもじゃろっ」

「やっぱり・・・」

俺達は立ち尽くしたまま長老の言葉に耳を傾けた。

「じゃが・・・」

「？」

と、長老が躊躇いを表す。

「あのような感染症は長年生きてきた中でも見たことはない。おそらくこの世界の細菌ではないであろう」

「・・・まさか」

嫌な予感はしてた。

でもその予感が的中するとは思ってなかったししてもらいたくもなかった。

「・・・おぬしらニンゲンの仕業じゃ」

〈第四十三章〉

耳を覆いたくなるような事実だった。

長老の口から発せられたのは俺達人間がシーナをあそこまで追いやっているということだ。

「そんな・・・でも、私達は何も・・・」

篠崎が今にも泣き出しそうな声でつぶやく。

「分かっておる。おぬし達ではない」

そんな篠崎を優しい声で慰める。

「じゃあ一体誰なんです?」

杉弓が迫るようにして長老に問いただす。

「・・・先日、フリントとシーナはニンゲンに襲われ傷を追った。おそらくは・・・」

長老はそのしわがれた声を弱くしてつぶやいた。

「・・・なんてことをしゃがる。惨すぎるぜ」

「そんなに同胞を攻めるな。そやつらも生き残りたくて必死だったのじゃろっ」

俺達人間がやったことに底知れぬ恐怖を抱いていると、長老の口から予想だにしない言葉が零れてきた。

こいつは・・・なんて狼なんだ。

驚きは隠しきれなかった。

まるで神のような寛大な心を持っている。

もしかしたら神の生まれ変わりなのかもしれない。そう思わせるよ
うな一言だった。

「なにか助ける方法はないのか!？」

「・・・我らはおぬしらにとっては化け物なのだぞ?それを助ける
というのか?」

「昨日も言ったる?怪我してる奴は助けるってのが俺の心情だ」

本音だった。

シーナを助けない。あの苦しみからシーナを救ってやりたい。

そう思わせる心からでた嘘偽りにない言葉だった。

それは篠崎や杉弓も同じだった。

「・・・おぬしら・・・」

まっすぐと長老の目を見つめる。

「全く・・・おぬしらは分からぬ」

小さくつぶやくと長老はその大きな体を引き起こす。

「ここから遙か南に『ユニコーン』」が住まう泉が存在する」

「ユニコーン？」

「そうじゃ、彼らの角はどんな病も瞬時に直す靈薬になるのじゃ」

「じゃあ、それを使えば！！」

希望が心いつぱいに満ち溢れた。

「ああ、直るじゃろう。だが・・・」

言いよんだその言葉に俺の希望は少し霞む。

「彼らは純真な心を持った純潔の乙女の前にはしか姿を現さぬ」

「純潔の・・・乙女」

何故か無意識に篠崎のほうを向いてしまった。

本当に無意識だ。

長老も杉弓も篠崎のほうを向いていた。

「え、ええ！？わ、私！？」

篠崎が頬を真っ赤に染めながら声を荒げる。

無理もないだろう。

もし俺が女で同じ立場だったら恥ずかしくて死にそうだ。

「そなたの匂いからは汚れた匂いはせぬ。きっと彼らも現れるだろう」

「そりゃあ・・・まあ、まだですけど・・・」

長老・・・匂いって・・・

いや！そんなことより頼みの綱は篠崎だけだった。

「頼む篠崎。その泉まで行こう」

「・・・」

俺の言葉に恥ずかしそうに顔を俯かせる。

無理は承知だ。

「頼む」

「わ、わかりましたよあ・・・もう」

そういつて篠崎は何とか了解してくれた。

〜第四十四章〜

「グリムハウンド様！！大変です！！」

不意に駆け込んでくる足音と聞き覚えのある声が響き渡った。

「何事じゃフロント？」

駆け込んできたのは息を切らしたフロントだった。

「二、ニンゲンが！昨日襲われたニンゲンが、洞窟の前に！！」

「な、んじゃと？」

「なんだって！？」

フロントの口から予想だにしない言葉が発せられた。

「間違いないです！昨日の二人組みです！」

「こんなときにー！！」

そういうと杉弓が全速力で駆け出して行ってしまった。

それに続いて篠崎とフロントも駆け出していく。

くそっ……最悪だ。

どこまで醜いんだ俺達は……

露になる怒りが堪えきれず、握り締める拳からは一筋の血が流れ出た。

「……くそ!！」

堪えられなくなり俺も駆け出そうとする。

「待つんじゃイオリ!！」

その刹那、長老に呼び止められてしまった。

「何をするつもりじゃ……まさか同胞と争うわけではあるまいな?」

「……でも。ここみんなを見殺しにするつもりもない!」

力の籠った声が上がってしまう。

頭にも完璧に血が上がってしまった。

「人間は……俺達人間は必ずやられたらやり返さなきゃ済まない生き物なんだ……ここみんなが危ない!！」

「……ひとつ聞いてくれるか?」

決心したかのように長老が口を開く。

「な、なんだよ……」

「フロントとシーナは・・・」

のどを唾が通り過ぎる。

「ニンゲンの血を引いている」

え？

なんだって？

ニンゲン？

人間の血？

「どづいう・・・意味だよ・・・」

言葉に頭がついていっていなかった。

意味が分からない。理解できない。

「二人は・・・この世界にやってきたニンゲンの女とウインガラム族の間から生まれたのじゃ」

「・・・嘘だろ」

言葉の意味が理解できない。頭の中が機能しない。

「嘘などではない。数年前、おぬしらと同じように現実世界からやってきたニンゲンがある。そのなかの一人であった女がウインガラム族に捕らえられ陵辱されたのじゃ」

頭の整理が追いつかない。言ってることが信じられない。

「一人だった女は、森で出くわしたウインガラム族に襲われ集団で鬻り者にされたのじゃ。そのときに身ごもったのがあの二人じゃ」

言葉を信じたくない。信じてたまるか。

「女が妊娠したことを確認したウインガラム族は一旦陵辱をやめたが、二人を出産すると再び女を鬻り者にし始めた。女はそれが耐え切れず、二人を残して自害。森に置き去りにされた二人をダツシユとロードの父親が拾ったじゃ。それでワシらが育てた」

唾を飲み込むことさえ忘れていた。どんどんと頭に入ってくる真実に時間さえ止まっているのかと思わされた。

「二人はこのことを知っておる。フリントは自分達を置き去りにして死んだ母親のことを恨み、それがニンゲン嫌いのもとにはなったのじゃが、シーナはニンゲンである母親を恨まず、かといって母親を死に追いやったウインガラム族を恨んではない」

そうか・・・だからシーナは頑なに自分達の出生を明かさなかったのか。

「そう、だったのか・・・」

言葉なんて出てくるはずもなかった。

悪いのはウインガラム族。でもウインガラム族がいなかったら自分達は生まれていない。

「・・・二人を救ってやってくれ」

「ああ」

頭を下げる長老を尻目に俺は洞窟の外へと向かっていった。

〈第四十五章〉

早まるなよ！篠崎達も襲ってきた奴らも！

暗い洞窟の中を俺は一人で駆けていく。

今は人間同士で争ってる場合じゃないんだ。

この世界にやってくるはずの危機を救い、この世界から無事生きて帰ること。

これが俺達人間のやることだ。

決して・・・決して争うんじゃないぞ！

そんな思いを胸に洞窟の外の明かりを目指してただひたすらには走り続ける。

フロントはどこに行ったんだ？

シーナのところか？

もしあいつが人間たちと対峙していたら大変なことになる。

取り返しのつかないことに。

まずは目の前の危機を、シーナを助けなきゃ。

息が切れるのが感じられない。

きっとそれほど必死なんだ。

不意に目の前に一筋の明かりが見え出す。

出口だ！

俺はそれ目掛け脚を早めた。

日の光の下に躍り出る。

こんなジャングルでも激しく照らし出すほどの光。

目を慣らすのに時間が掛かったが次第に景色がはっきりとしていく。

俺の目の前に移った景色は洞窟の入り口の前に立ちふさがる篠崎と杉弓、ダッシュとロード。

そしてそれと対峙するように佇む二人の人間だった。

「杉弓！篠崎！」

「上総か、遅かったな」

空気は完全に緊迫状態。

少しでも突付けば一気に争ってしまいそうなほどに張り詰めている。

「おいおい、なんだよお前ら。まだ化け物に加担する人間がいたのかよ」

不意に帽子を深々と被り、髪を金髪に染めた二十代くらいの男が声をあげた。

二サイズも大きい服とズボンを着ていて誰がどう見ても柄が悪そうなのは一目瞭然だ。

「こいつら本当に人間なんですかねえ？」

もう一人の男、柄の悪そうな男とは正反対で、髪は黒、知的な眼鏡を掛けていて服装もかなりぴちっとしている。

「何しに来たんですか？あなた達」

篠崎が声を上げる。

「「何しに来たんですか？」だってよ！聞いたか？」

「ええ、しっかりこの耳に響いてきましたよ。まったく馬鹿な女です」

嘲笑うように篠崎の言葉を復唱する男とそれを貶す男。

「質問に答えてください！」

その言葉に苛立ちを覚えたのか、少々怒声を交えた声で男達に投げかけた。

「篠崎、落ち着け」

その様子を見て明らかにまずいと思い、篠崎に注意を促す。

「・・・なんだこのアマ。生意気だな」

「あの弱らせた狼の化け物どもを殺しに来たのですが・・・ムカつきますねえ」

ぴんと張り詰めていた空気の糸が途切れた瞬間だった。

眼鏡の男は両腰に納めていた二つのナイフを手取る。

柄の悪そうな男はそれらしい武器は持っていなかった。

駄目だ、もう止められない。

がらつと変わった空気の印象と男達の行動が俺にそう思わせる。

「グルルル」

「ウウウ」

ダツシユとロードもそれを察知して男達を威嚇し始めた。

「杉弓！篠崎！それにダツシユとロード！」

俺が声を荒げる。

それに反応して二人と二匹が振り返った。

「今は争ってる場合じゃない。四人でユニコーンの泉に向かってくれ！ここは俺が引き受ける。ダツシュとロードは二人の道案内も兼ねて護衛してくれ」

「けど！！」

俺の提案を一発で了解してくれるとは思っていない。

「いいから行け！シーナを見殺しにするつもりか！？」

だから、怒りをこめて声を荒げる。

「・・・はい。分かりました」

分かってくれたのか篠崎達は頷いて武器に手を掛けるのを止めてくれた。

「なにを「ごちゃごちゃ」と話してるんだよ？」

「作戦会議ですか？」

今にも襲い掛かってきそうな男達。

その言葉を発した瞬間、篠崎達がダツシュ達に続いて泉のある方角へ走り出した。

「無事に帰って来いよ！！」

「上総君も!!」

走り行く篠崎達に声を掛けると俺のはなった言葉をそっくりそのまま返されてしまった。

「へっ、信用されてねえな俺」

そう言っつて背中に携えていた武器を両手にはめ込む。

「……てめえ、かつこつけやがって……」

「女を逃がすとは……男の鏡ですねえ」

明らかに怒り心頭している男達。

「俺は争いたくはないが、無抵抗に殺されるつもりもない。かかってこいよ」

右手の中指で相手を威嚇する。

「……殺す!!」「」

その挑発に完璧に嵌った男達が俺目掛け飛び出してきた。

「!?!」

一際大きな金属音が響き渡る。

二対のナイフの斬撃を見切って上に弾いた。

「らあ!」

そのまま無抵抗に両手を挙げた眼鏡の男の腹部を蹴り飛ばす。

「ぐふ!?!」

四肢強化の力が眼鏡の男の体を後方へ矢の様に吹き飛ばした。

「陣内!?!」

後方に居た男のすぐ横を飛び去り後方の木に激突した。

どうやら眼鏡の男は陣内と言う名前らしい。

「てめえ……こんの……」

怒りをあらわにした表情で男が俯き

「死にさらせ!?!」

両手を振りかぶったかと思うとその手が一気に何本もの銃身を持った巨大なマシンガンのように変形した。

「な!?!」

驚きで体が一瞬強張る。

その刹那、男の銃身が吼えた。

「おららららっ！！」

反射的に両手を前に翳す。

そして、空気の壁を作った。

無数の弾丸が空気の壁に激突しものすごい衝撃と轟音、爆煙を巻き上げた。

猛烈な衝撃が空気の壁から両腕へと伝わってくる。

「はっはっは！どうしたどうした！？それでわかりかあ！？」

高らかな笑い声を上げながら両腕のマシニングンを唸らせる。

次第に空気の壁に伝わる振動は収まった。

時間にして一分近くは打ち続けていただろう。

どれだけ弾丸があるんだよ！？

攻撃が止んだことを確認して空気の壁を解除する。

柄の悪そうな男と俺の間合いの間に爆煙が未だ消えずに立ち込めていた。

攻撃ならいまがチャンス！！

俺は拳を後ろへ引く。

「ふん。くそがき、死んだか？」

くらえ！！

そして拳を一気に前へ撃ち放つ。

爆煙を貫いて弾裂空が男目掛け一直線に突き進む。

「な！？」

それに気づいた男が両腕のマシニングンを盾に防御体制を取る。

鋼鉄を砕く轟音とともに男の両腕のマシニングンを破壊して吹き飛ばした。

眼鏡の男、陣内の激突した木を貫いてその後方の木に激突する。

あたりに静けさが戻った。

〜第四十七章〜

「やったか？」

「そんなわけないでしょう」

不意に後方から陣内の声が聞こえてきた。

後ろ！？

気づいた時には遅かった。

「ぐああ！？」

陣内のナイフが俺の左肩を捕らえ鮮血を撒き散らせた。

右手で左肩を押さえ、地面に片膝を付く。

陣内はそのまま飛び退くようにもといた場所へと舞い降りた。

「くくくく」

くそ・・・だが、いける。傷は浅い！

地面を握りゆっくりと立ち上がる。

「ああ、言い忘れていましたね。私の能力・・・」

「なんだと？」

陣内が狙っていたかのように笑いながら声を上げる。

「私の能力は『ポイズンクロウ』。毒の爪ですよ。私は毒をこの両手から相手に感染させることが出来るんです」

毒の爪？まさか！？

「ふふふ・・・そうです。あの狼の化け物に毒を感染させたのが私ですよ！あっははは！！」

高笑いの声が静かなジャングルに響き渡った。

・・・この、くそやろうが。

「あなたにも流し込んでやりましたよ」

こいつのせいで・・・

「ちなみに解毒方法は存在しませんよ？何せ私が作ったのですからね！あは！」

こいつのせいで、シーナがあんな思いを・・・

次第に拳を握る力が強くなっていく。

「まあ、もって三日というところですかね」

許さねえ。

「てめえ……」

「はい？」

「もう喋んじゃねえ……」

怒りのボルテージが限界を超えてふつつつと煮えたぎっている。

やべえ、こいつ殺してえ。殺さねえと気が済まねえ。

俯きながらドスの聞いた低い怒声をあげる。

「く、死に底ないが！死ねえ！！」

恐怖を感じたのか一瞬体をたじろがせながら、陣内がナイフを構え向かってきた。

再び両のナイフが襲い掛かってくる。

俺はまた防戦を強いられた。

「くー！」

くそ……体が重てえ。

「どうしましたあ？動きが鈍いですよあ？毒でも回りましたかあ？」

凄んでは見たもののやはり毒のせいか体が思うように動かない。

笑い声を上げながら陣内のナイフが牙を向いてきた。

「くう！」

なんとか一瞬の間を突いて前転で陣内の後方へ回避する。

しかし、前転で交わしたはいいものの体を思うように動かさず起き上がれない。

「はは！どうしました？足でも纏れましたか？」

それを見た陣内が攻撃の手を止め再び高笑いする。

くそ・・・つくづくイラつく奴だぜ。

なんとか立ち上がり打開策を模索しながら武器を構える。

〜第四十八章〜

どうすればいい。こいつのこのすばやい動き。二対にナイフ。

打開策を考えながら、襲ってくる二対のナイフを捌く。

「ほらほらほらほらほらあー!!」

陣内の声が頭に響く。

不快な声が俺の考えを纏まらせてくれなかった。

「ぐー!!」

一瞬足元がふらつく。

「そこおー!!」

その一瞬の隙を見逃さなかった陣内がナイフを振りかざす。

「ぐ、うあああー!!」

右手のナイフが眼前をかすめ右頬に切り傷を作った。

後方に飛びのき間合いを取る。

「また傷が一つ増えましたね」

にやけるその顔を殴り飛ばしてやりたかった。

くそ、この眼鏡野郎が・・・

眼鏡？

そうだ！

一つの打開策が頭に浮かんだ。

しかしそれはあまりにも不確かでありにも危険な策だった。

「へ、こっからさ」

「その自信はどこから来るんですかね！！」

陣内が地面を蹴り駆け出す。

俺も陣内の行動を見てカウンターで前へ掛ける。

陣内よりも数倍速い速度で。

「はや・・・」

陣内の眼前で斜め前の空中へ飛び上がり頭上を越える。

すれ違いざまに陣内のあごを掴み、弾き飛ばす。

何回転もバック転をするように陣内が回転する。

「ぐあああ！！」

そのまま前方へ吹き飛びながら地面へ叩きつけられた。

「くううう、このガキィ！」

成功だ。

顔を抑えながらゆっくりと立ち上がる。

が、陣内はすぐさま辺りの異変に気づいて慌てだす。

「眼鏡！！眼鏡が！？」

すれ違いざま陣内の掛けていた眼鏡を奪い取ってやった。

どうやら陣内は極度の近眼で眼鏡がないとほぼ何も見えないに等しいらしい。

俺の姿が見えていないようで辺りをふらふらと歩き回るだけだった。

「このことかあ？」

眼鏡を掲げ陣内に声を掛ける。

声に気づいたのか俺の方を向いた。

「か、かえせえ！！」

慌てふためくように声を上げる。

俺の勝ちだ。

「今返してやるよ」

地面の砂を巻き上げ駆け出す。

「え？」

そのまま左手を前に翳すようにして陣内の顔面に眼鏡を押し付ける。

それと同時に胸部をブレード・フィンの刃で貫いた。

「え？あ、え？」

白銀の刃を引き抜くとそこから大量の血が噴水のように噴出した。

「いやだ・・・死にたくない」

胸部を押さえながら後方へ後ずさりしていく。

両手で押さえ替えているも、その行為も空しく血液は滝のように流れ出していた。

「いやだ・・・いやだ・・・」

ついに下がることを止めて、両膝を地面へつく。

「嫌だあああああああ！！！！！！！」

そのまま悲痛の叫び声をあげて地面へと倒れこみ絶命した。

「・・・俺は」

不意に感情が静まり冷静になる。

陣内に目をやると体の周りに真っ赤な血だまりが出来ていた。

「じん、ない？」

冷静になった耳にもう一人の男の声が聞こえてきた。

〜第四十九章〜

声のした方向に視線を移してみるとそこにはさきほど俺が吹き飛ばしたガラの悪い男が震えながら陣内の亡骸を見つめていた。

「てめえ……やりやがったな……」

明らかに怒りに見ている満ちているのが分かった。

もともといかつい見た目をしていたためかなりの威圧が掛かる。

「殺す……殺す……殺してやる!!」

男が吠え出した。

その途端に破壊したはずの両腕のマシンガンが再生されて再び装着された。

「俺が……殺したのか」

何故か争う気にはなれなかった。

自分のしてしまったこと。

それがどれほどのことなのか、この男の怒りようを見れば簡単に理解できた。

俺は人殺しをしてしまった。

「あああああ！！！」

急に吐き気が襲ってきた。

堪えられずその場に吐き出す。

とめどなく溢れてくる汚物はどんどん水溜りを作っていく。

「ごおえ！おええ！」

どれだけ吐き出せばすむのか。

胃の中はもうすでに何も残っていない。

なのに吐き気はおさまることを知らない。

「死ねえええ！」

男がマシンガンを構えた。

その何十本もの銃身がこちらを向き今にも牙をむき出そうとしている。

このまま打たれれば楽になれるかな……

「！？何考えてんだ俺！？」

不意に自分で考えた言葉に意識を取り戻させられた。

なんというか、自分に命を救われたような気がした。

男の銃身が吼える。

間に合え！！

俺は瞬時に向かってくる弾丸との間に空気の壁を作った。

「あああああああ！！」

怒り狂った弾丸はとどまることを知らず己のみを削りながら壁へと打ちつける。

くそ！？さっきの比じゃねえ！？

弾丸一つ一つが重たく先ほどよりもすばやい間隔で打ち付ける弾丸。

それに堪えることが出来なくなってしまった。

「あぶねえ！？」

空気の壁にひびが入るのが目に入った。

その瞬間俺は真横に飛び跳ね空気の壁を打ち抜きもといいた俺の場所の地面に襲い掛かる。

すでにそこに俺はいないのに凶弾の如く地面を削る。

「そおこおかあああ！！！！」

煙が晴れて俺の姿を目視したのか男はマシンガンを撃ち続けながらその銃身をこちらへ向ける。

「くそ!?!」

それを空中へ飛びのいて交わす。

しかしそれは誤った回避だとすぐさま思い知らされた。

「馬鹿ガアア死ねええええ!!」

やべえ!?!

男はすぐさま銃身を空中へと向けなおす。

瞬時に両手を眼前でクロスさせ空気の壁を作る。

しかしそれは数発防いだけですからすぐに貫かれた。

「く・・・」

俺はすぐさま武器を盾にして丸くなるようにして弾丸を防ぐ。

凄まじい衝撃と激痛とともに俺の体は空中で真後ろに吹き飛ばされた。

〈第五十章〉

「ぐうお!!」

突き刺さってきた弾丸の威力は凄まじかった。

一発一発に怒りが込められていて尚且つ強烈な重み。

遙か上空で俺の体は矢のように地面と水平に吹き飛ばされた。

「ぐつはあ!!」

空を裂いて突き進んだ俺の体は後方にあつた大木をなぎ倒して静止した。

衝撃が全身に伝わり、口から多量の血を吐く。

毒も回り始めて内臓自体が悲鳴を上げだしたように感じる。

力が緩み地面に片膝をついてしまった。

「くそ・・・」

それにしても・・・

なんであのマシンガンみてえなやつは弾切れを起こさないんだ!?

かれこれ三分近くは打ち続けてるぞ?

無数に銃身があるとはいえあの中にあれだけ長い時間打ち続けられる弾丸が入るとは到底思えねえ。

地面に吐血した血を握り膝を片手で押しながらゆっくりと立ち上がる。

前方から地面を踏みしめる足音が聞こえてきた。

「どうして弾切れしない？ってツラしてんな」

「へっ……心読んでんじゃねえ……」

やべえ……視界が……歪む。

「まあ、ここで俺が殺し損ねても陣内の毒で勝手に死んじゃうからな。教えといてやるよ」

男が両腕のマシニングンを頭上に掲げた。

「俺の能力は身体融合。武器を体の一部にすることが出来る。それと武器の能力は……」

激しい頭痛が襲ってくる。

「エア・イン・オート・リロード。弾の自動装填だ。空気中に分散した無数の塵を弾丸に変換して勝手に装填してくれんだよ」

嘘だろ……つうことは……

驚きが表情に現れる。

それを見て男がにやけるとゆっくりと口を開いた。

「そうさ・・・いくら撃っても弾切れは起こさねえ!!」

頭上に掲げていたマシンガンを振り下ろす。

「・・・そういや名乗ってなかったな」

太陽光に反射してなのか銃身がきらりと一瞬輝く。

くそ・・・動かねえ。

「俺の名前は・・・」

くそ・・・

くそ!!くそ!!くそお!!

「竜田虎次郎だ!」

「動けえええ!!」

ダダダダダダ!!

無数の弾丸が放たれた。

駄目だ・・・助からねえ・・・

瞳を閉じて死を覚悟した。

無数の銃声も次第に聞こえなくなり、自分の息をする音さえも耳に入らなくなった。

まるで、辺りの時間が止まったかのように。

何も感じなかった。

それどころか弾丸で貫かれるからだの痛みすら感じられなかった。

ああ……きつともう撃たれてるな。

痛み……感じねえ。

音も、衝撃も、何も。

よかった。

死ぬときに何も痛みを感じないで死ねて。

死ぬ？

そうだ。杉弓と篠崎。それに……

姉ちゃん。

わりい。俺死んじゃったわ。

杉弓……お前はめちゃくちゃ強えから生き残れるだろうな。

篠崎・・・お前なら冷静にさえなっていれば頭のきれやっただからきつと生き残れるだろうさ。

姉ちゃん・・・

ごめんな。助けにいけない。

今朝の最後のお願ひ・・・

こんなことになるんだったら・・・

聞いていければよかったな。

ごめん。

しー姉・・・

〈第五十一章〉

・
・
・
・

・
・
・

あれ？

俺は死んだのか？

何も見えないし、何も感じない。

これがあの世？

真っ暗じゃねえか。

自分が死んだことすら分からなかった。

痛みもない。音も聞こえない。何も見えない。

こんな真っ暗闇な世界が果たしてあの世なのかさえ分からなかった。

無理もない。何せ見たことがない。

すると突然、視界に光が差し込んできた。

うっ
・
・
・

俺の目に飛び込んできたのは・・・

え・・・

姉・・・ちゃん？

「大丈夫か！？イオリ！」

しかし、その声は俺の思った人とは違った。

背中には二対の荒々しい翼。

壮麗で蒼穹のように曇りのない青い瞳。

「シ、ーナ？」

一瞬、ほんの一瞬だが俺の姉とその姿が重なった。

太陽の光で反射する爪で俺と弾丸の間に割って入り、それをすべて叩き伏せていた。

「上総君！！」

「上総！！」

シーナの姿に見とれていた俺の耳に二つの聞き覚えのある声が響き渡った。

篠崎に・・・杉弓。

なんでここに・・・

ユニコーンの泉に向かったんじゃない・・・

そうか、シーナがここにいてるってことはもう角は貰ってきたんだな。

木に寄りかかるようにして腰の力が抜け落ちた。

そのまま地面へとへたり込む。

「毒は・・・大丈夫なのか？」

「ああ、篠崎と杉弓のおかげだな」

「そうか・・・よかった」

その言葉を聴いてさらに安心してした。

すでに死んでしまったのかと思っていたがどうやら助けられたらしい。

視界に入った竜田も驚きの表情を隠せないでいる。

その視界の隅から篠崎と杉弓が駆け寄ってくるのが見えた。

「大丈夫ですか!？」

「酷いやられようだな・・・ちくしょう。人間とやりあうことになるなんてな・・・」

「本当……だぜ……つたくよ、」

あ……まずい、意識が……

視界が霞んでいく。

「……くん!?……り……て!!」

「……い!?か……さ!?!」

薄れ行く意識の中二人の声が掠れていきながら意識を手放した。

〜第五十二章〜

「杉弓視点」

「はあ！・・・はあ！・・・」

息が苦しい。足が進まない。

何故だ。

こんなに早く急いで駆けているというのに自分の体が全く前に進んでいないかのように錯覚する。

ウインガラム族の洞窟の前で二人組みの人間たちと対峙していて今にも争いだしてしまいそうな雰囲気だったが、後ろから上総が現れてその空気が一変した。

『今は争ってる場合じゃない。四人でユニコーンの泉に向かってくれ！ここは俺が引き受ける。ダッシュとロードは二人の道案内も兼ねて護衛してくれ』

はつきり言っこの上総の言葉には驚愕した。

確かにシーナさんの状態はかなり危険なところまで陥ってしまったが、いたがかと行って俺達自身まで危険に晒すことはないと思った。

グリムハウンドに呼び止められて何を言われたのかは知らないがあまりにも危険すぎる判断だった。

無論、俺達は反論したが上総がそれを押し通して今は篠崎、それにダッシュとロードの道案内でユニコーンの泉に向かっているところだ。

「くそ・・・体が重たい・・・」

いくら足を前に前に踏み出してもダッシュたちに近づくとところか篠崎にも徐々に離されてしまっている様な感じがする。

「杉弓さん！大丈夫ですか！？」

不意に前を走る篠崎が俺の方を振り返り声を掛けてくれた。

「大丈夫だ・・・」

畜生。情けない話だぜ。

体力で女の負けるなんてよ。

それが俺のプライドに火をつけて重たい足取りを加速させた。

「ワウ！！」

数分走ると急にダッシュが止まり吼えた。

近くに駆けて行くとそこには一面に広がるとても綺麗な泉がせせら

いでいた。

「これが・・・」

「ユニコーンの泉・・・」

俺と篠崎はその壮麗な泉の姿に目を奪われしばし時の流れを忘れてしまうほどだった。

「ワウウ」

突然、ロードに服の裾を引っ張られる。

「な、なんだ？」

「ウウウ、ワウ！」

いや、分からないし。

言葉が通じるはずも泣くロード言いたいことが全く分からなかった。

こんなことならプリントを連れてくるべきだった。

しかし、プリントは何をしているんだ？この一大事に・・・

色々考えていたときにふとあることに気がついた。

純潔の人間の処女・・・

そうか！篠崎の前にしかユニコーンは現れないからロードはここか

ら俺を離そうとしているんだな。

そう感じ取って篠崎には気づかれないように後方の草むらに身を隠す。

そこにはすでにダッシュも隠れていた。

早いな・・・

〈第五十三章〉

「篠崎視点」

目の前に広がる陽光に反射して輝く壮麗な泉。

私はそれに心ごと目を奪われていました。

「・・・綺麗」

単純な表現ですがこの言葉しか出ません。

思考すら奪われてしまうような美しさでした。

「あれ？杉弓さん？」

どれ位の間、泉に時間を奪われていたのか、先ほどまで隣にいた杉弓さん、それにダッシュとロードの姿が見えません。

辺りをいくら見回しても気配も姿もとられることは出来ませんでした。

ふと視界の隅に入っていた泉の水面に波紋が広がる。

風などは吹いておらず何故広がったのか分かりません。

気になって泉に視線を移しました。

「なにも・・・いない？」

しかし、そこには何もおらずただ泉の奥から波紋が広がってくるだけでした。

『汝、人間ノ女子カ？』

「!?!」

その刹那、どこからか声が響いてきた。

いや、これは・・・

『答エヨ、汝、人間ノ女子カ？』

直接、脳みそに語りかけてきているようです。

頭の中に広がっていくその声はまさに水面の波紋の如く徐々に大きくなっていく。

「は、はい」

少なくとも声が聞こえてくるということはこの周辺にいるということ。

しかし、いくら辺りを見回しても声の主を捉えることは出来ません。

『我ラ、ユニコーンノ泉ニ何用ダ？』

やっぱり・・・この声の主はユニコーンでしたか。

「・・・仲間を助けるため、です」

嘘はついていない。緊張が広がり何とか紛らわそうと生唾を飲み込む。

『仲間？アノ中途半端ナウイングラムノ女子ノコトカ？笑ワセル・・・』

なんで知って・・・それに中途半端ってどういう意味？

『汝ラノ心ヲ読ムナド容易イコトヨ・・・』

心まで・・・

「そう、ですか」

未だ姿を見せずに私の頭に直接語りかけてくるユニコーン。

『シテ、ナゼ同種族デモナイ者ヲ助ケル？』

「理由なんかありません。困っているから、辛そうだから、その苦しみから助けてあげたい。それだけです」

『ナゼソウ思ウ？』

「理由はありません。苦しんでいる人はみんな助ける。私はそう決めましたから」

『・・・』

急に声が聞こえなくなった。

頭の中に響いてくるといふ感覚もなくなり、今まで何も聞こえなかった辺りの音も次第に聞こえ出す。

不意に水面に何かが着水する音が聞こえました。

その音のしたほうに目をやると、水面の上に四本の足で立つ生き物が目に飛び込んできた。

「ユニコーン……」

私はそれが目的の生き物……ユニコーンだと人目で確信しました。

「……お前は優しすぎる」

今までの頭直接語りかけてくるような、とても固い口調ではなく柔らかい声で話しかけてくる。

「お前は目に映るすべてのものを救って見せようというのか？」

ゆっくりと水面に浮かぶ歩を私のほうに進めてくる。

「お前はたとえ助かることのないものでも救おうと言っのか？」

「……分かりません。出来るかどうかはわかりません。でも考える暇があるくらいなら私は救ってみせようと思います」

「……そうか」

私の眼前までやってきたユニコーン。

そして、ゆっくりとお辞儀をするように私の前で頭うきを垂れた。

「受け取れ」

「ありがとうございます！」

ゆっくりと手を差し出すとその上にユニコーンの角が現れた。

何層にも擦れ上がったその角は淡い光を発し、微かな温もりすら感じる。

まるでこの角自体が生きているかのように。

「私の名はユニセロス。人間の女よ、覚えておいてくれ」

「はい……」

頭をあげてそう言ったユニコーンの声はとても優しくかった。

「私は篠崎未来です」

何故名乗ったのでしょうか？でも名乗らなくてはいけない。そんな気がしました。

「そうか……未来よ。ウインガルの女が助かったら再びこの地へ訪れてくれ。そなたに力を授けよう」

そう言ったユニコーンの声はどこか弱っているように感じがしました。

「大丈夫ですか!？」

「なに・・・力の源を授けたのだ。少し疲れただけのこと。死にはしない」

心配せいで声を掛けるもそう言われてしまいどうすることも出来なかった。

なぜか罪悪感に見舞われる。

「気にするな・・・我は少し休む。またま見えるときを楽しみにしておるぞ」

そう言ってユニコーンは泉の奥に姿を消してしまいました。

「・・・ユニセロス」

つぶやいた言葉もユニセロスには届くはずもなく、辺りは再び静寂に包まれました。

少しした後には後方の草陰から杉弓さんたちが出てきて角を貰ったことを報告すると急ごうといわれその場を脱兎の如く駆け出し、シーナさんの待つ洞窟に向かいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5785i/>

シャットダウン

2010年11月11日08時12分発行